



むすの衣裳  
備  
集  
の  
巳

大妻コタ

5  
0

593.11  
089-3

系大學科庭冢

(22)

和

服

裁

縫

會究研活生化文

583  
0  
0

和  
服  
裁  
縫

大  
妻  
コ  
タ  
カ



屏  
畫  
織  
田  
一  
磨

裝  
幀  
岸  
田  
劉  
生

28211



目次

和服裁縫

大妻コタカ

本裁長着.....	一
中裁小裁長着.....	三
本裁羽織.....	六
小裁中裁羽織被布.....	九
長褙袴.....	八
帯.....	九
袴.....	三三
コート.....	二六
小袖及び重ねに就いて.....	二四

## 本裁長着

### (1) 本裁女物單衣 (木綿物)

#### (一) (並巾物、棒衤裁ち、釣衤裁ち)

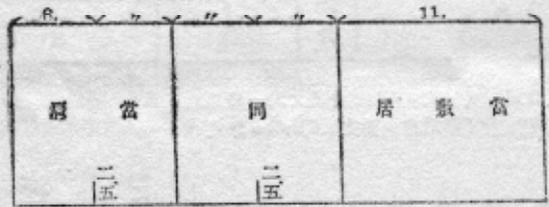
普通の長さの一反物で、並寸法の仕立てたら棒衤裁ちとして、單衣物の場合は一尺二、三寸(四、五、六、七、八、九、四寸)の布を取つて居敷當としますが、袖丈が長かつたり、總尺の短かい時には居敷當は取れませんか別々の布で居敷當、肩當を取ります。

肩當 居敷當布用布の不足の場合、又は、表地の餘り厚いものゝときには、横布肩當を用ひます。肩當の長さは、仕立上げの肩巾に五分を加へた寸法の二倍の丈で宜しいです。又衤肩明は、仕立上げの衤肩明の寸法丈きるのであります。

第四圖  
布の折り方

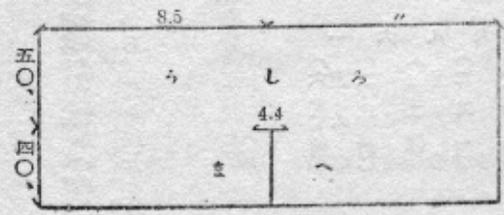


第五圖  
肩當と居敷當の裁ち方

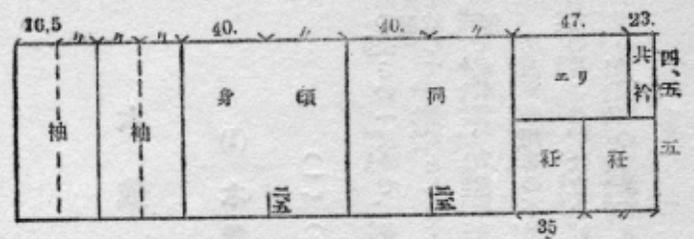


肩當の丈×4+居敷當丈=肩當居敷當用布

第六圖  
横布肩當の裁ち方

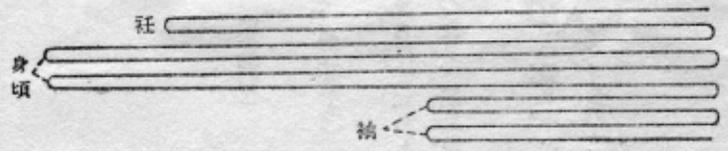


第一圖  
本裁女物單衣 (袴衿の裁ち方)

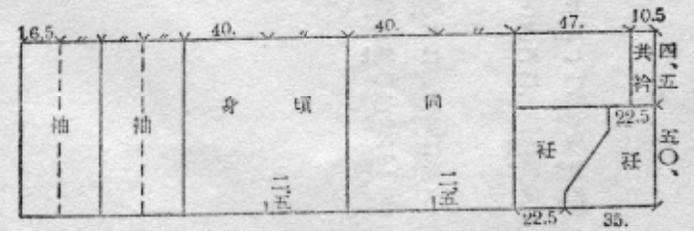


(公式) 總丈-(袖丈×4+衿下り×2)÷6=身丈  
身丈-衿下り=衿丈  
(仕立上げ身丈-衿下+衿肩廻し+衿先縫代)×2=衿丈

第二圖  
布の折り方



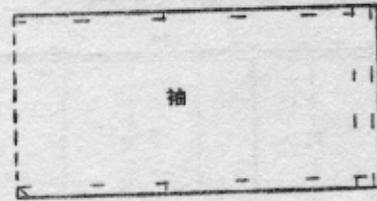
第三圖  
本裁女物單衣 (鉤衿の裁ち方)



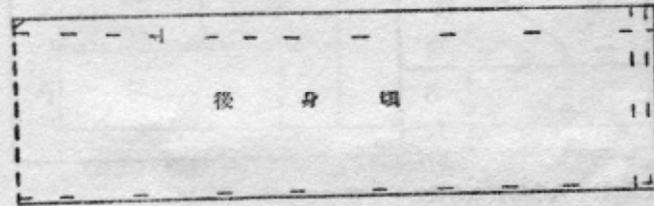
(公式) 總丈-(袖丈×4+衿下-鈎下)÷5=身丈  
仕立上げ衿下+裾縫代+2=鈎下



(1)



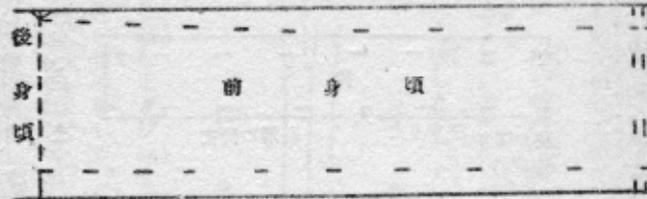
(2)



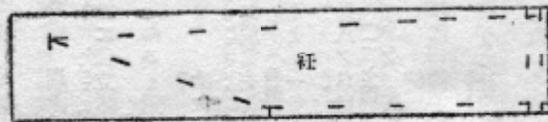
丸形を袖下、袖丈の標に合はせて、つけます。

(2) 身頃 兩身頃を中表に重ねて、背を手前に、山を左にして置きます。身丈、背縫、後幅、袖附、身八ツ口、肩中の順に附けます。そして後身頃を(3)圖のやうに左手に取りのぞいて、前身頃を出し、前幅、衤下りの標をつけて、衤附の標を附けます。衤附の標は、衤下りの所で裁ち切り衤肩明より一分少なく。又裾から七、八寸は真直にします。

(3)



(4)



もの尺度渡し衤附の標をします。次に衤丈を衤附の標の所で定めて、其處で衤附の標の間を一分離して衤下とをつないで衤附の標をします。其の時衤丈を測ります。

(4) 衤 山を左に衤附を手前にして、衤丈、衤幅、衤山の標をつけます。

縫ひ方

(1) 袖 袖下の淺縫をして、袖口下に抄ひ留をして袖下まで縫ひ續けます。袂を丸にするときには、丸みの間は針目をやゝ細かく、其間は糸を引きしめ加減にして、縫ひしめは縫糸から一分離した所を、丸みの間で五針か六針縫つて、糸を

引き締めて製を作り、其製山を留めて丸形を入れて形を整へます。次に表にかへして、袖口を三分位の針目で結びます。

第九圖(三)



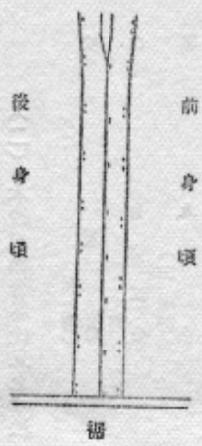
(2) 身頃 肩當、居敷當の所を除いて、背縫を二重縫にします。ぬき衣紋に仕立る時は、衿附のとき背縫の所の縫代を五、六分にして、衿をゆるく附けるとよいですから、背縫は上を四分位縫ひ残して置きます。次に肩當布附、背を縫つて布の端を伏せ縫ひにして、肩を右に肩當布を向ふ側にして背縫にとちつけます。居敷當は出来上り衿下より一寸上から附け、左、右、上の三方を耳筋にいたします。次に身八ツ口は抄ひ留をして脇縫をします。脇の縫目は圓のやうに割つて、七、八分位の針目で耳筋を致します。

(3) 衿附 衿下を五分位の針目で三つ折り結びにして、衿のゆるまないやうに衿附をします。衿附は衿下りから二寸位の間は衿附の餘り曲らないやうにしないと、衿附の時剣先がよく出来ません。衿

(4) 羅筋 三つ折りにして鉄をかけて、三分位の針目に結びます。衿附、脇、背の縫目、縫目には針目を必ず出して結びます。

(5) 衿附 衿肩明の間は衿を弛み加減に又衿下りの上、下一寸位づゝも弛く、其れから下の衿附は衿の弛まないやうに待針を打ちます。裏衿は表衿の待針を打つてから裏につけて待針を動かさぬ様に打ち直します。次は衿下に抄ひ留をして、衿肩明は針目を細かく、背縫で一針返へして衿附をします。

第十圖 方 衿の縫製



(6) 共衿縫 共衿は單衣物は、地衿と一緒にかけてもよいですが、別にかけるときは、幅を衿幅よりも一分せまく折つて、衿附の山に掛衿の山をよく合はせ、

又衿幅は精物のときは衿を地衿によく合せて、衿巾のところは一分折り、山から這入つた處を結び、角に抄ひ留めをして、衿附けを結びます。結び方は地衿の折り山から二厘奥に、又掛衿の折り山から二厘奥に針目を出して結びますと、きれいに出来ます。

(7) 仕上げ 木綿物は霧を吹いて押しをかければよろしいです。

(2) 本裁男物單衣

(一) 裁ち方

裁ち方は女物單衣と殆ど變りません。只袖丈が一般に短かい位です。

(二) 本裁男物普通仕立上寸法

袖丈	袖口	袖幅	袖附	袂 <small>たもと</small> 形	人身形	脇丈	裾	後巾	前巾	後巾
一尺三寸五分 (五一、二)	七寸五分 (二八、二)	九寸 (三、四、二)	一尺一寸五分 (四三、二)	五寸五分 (九、五、二)	二寸五分 (一五、七、二)	三尺五寸五分 (五一、三、二)	一尺三寸五分	後より五分下げる (六六、二)	一尺七寸五分	一尺七寸五分
八寸 (三〇、二)	六寸五分 (二五、二)	五寸 (一九、二)	五寸五分 (二〇、八、二)	四寸五分 (一五、二)	二分 (八、二)	二分 (八、二)	二分 (八、二)	二分 (八、二)	二分 (八、二)	二分 (八、二)
五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)	五寸五分 (一九、二)

前 衿

(三) 標の附け方

衿、標の標附方は女物と全く同じでありますから省きます。但し衿は仕立上げ衿中の二位に標をします。

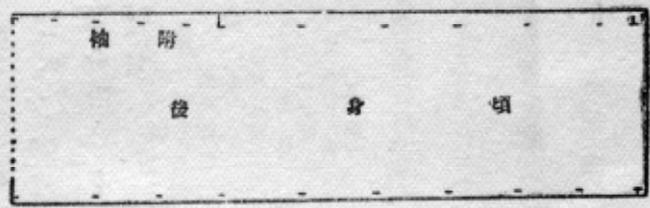
衿 下

一尺七寸五分  
(六六、二)

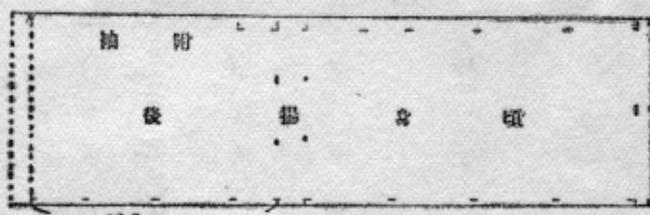
第十一圖  
(1)



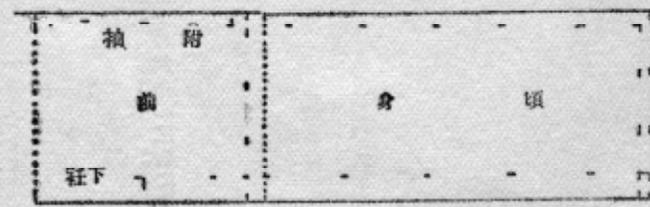
(2)



(3)



(4)

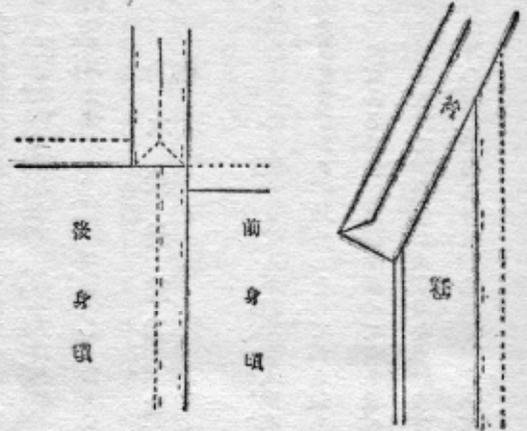


(四) 縫ひ方

第十二圖

揚の仕方

衿の折り方



す。衿をつけて、衿先を圖のやうに三角に折つて給けます。

(1) 袖 袖下から、人形迄縫ひ續けます。人形丈を先に、巾を後から打つて角を一針留めておきます。

其他は、女物と變りません。

(2) 身頃 後の揚を巾標から巾標迄、前の揚は布巾一つばいに縫つて折りを裾の方に折つて、表から裏をかけて、背縫、脇縫をして、肩當、居敷當をつけることは女物と同じですが、脇の縫目は揚がありませんから、圖のやうに折つて布の端を耳給けにします。

衿下衿、衿附、裾衿も、女物と同じで

(3) 袖附 袖山と身頃の肩山とを合せて、袖附の待針を打つて、袖附に留をして五分位の間は半返へしに、其他は稍小針に、袖山で一針かへして袖附をします。  
 (4) 仕上げ 霧を吹いて畳みます。畳み方は袖は袖附の縫目から折らないで五分位袖巾の方に  
 出して袖を折り畳みませんと、袖附が見苦しくなります。

(3) 本裁長着 (絹布、麻布)

(1) 裁ち方  
 裁ち方は木綿物と少しも變りませんが、絹布や、麻布は木綿物と違つて布の耳がつれてゐたり、又は弛んでゐたりしますから、地直しをしてから裁ちます。地直しは次のやうにいたします。  
 (イ) 耳のつれてゐる時は、烙鏝を使つて伸ばします。若し釣の甚しい時には布の耳の深さよりも狭い位に斜に鉄を入れて、全體に火熨斗をかけます。  
 (ロ) 反對に耳の弛んでゐる時は、ぬれ手拭をあてるか、耳に丈霧を吹いて、烙鏝をあてると縮みます。

(2) 標付け方

絹布類の標は、角筒ではつき惜いですから、先丸の烙鏝を焼いて、烙鏝標をつけた方がよいです。又地質に依つて、チヨークを用ひて糸標をつけても宜しいです。

(3) 縫ひ方

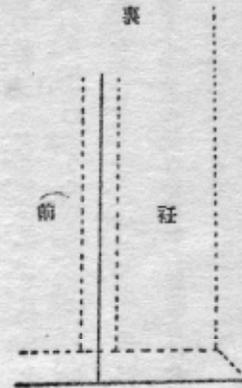
縫ひ方の順序は木綿物と變りません。違ふ點は左の様な事でありませぬ。  
 (イ) 地質に適當な糸を用ひて、針目は木綿物より全體に細かく七厘位の針目に縫ふ事。  
 (ロ) 殊に糸ごきをよくすること。  
 (ハ) 肩當の端は二分位の中の三つ折り給けにして、袖附の縫目に給けつること、又居敷當も耳を折つてつける事。  
 (ニ) 脇の縫込み、衿の縫ひ込み等は、耳を折つて給けつること。  
 (ホ) 裾の角は圓のやうに額縁仕立にすること。額縁の標の付け方は、裾から三分づゝ二本點線のやうに標をつけて、イロの寸法をイニに附け、更にロハの寸法をハホにつけて、ニとホを結ぶ斜線を引きます。其の縫ひ方は斜の線を合はせて細かに縫つて、縫目を烙鏝で割つて、衿下給、裾給をも折つて鉄をかけます。  
 (ヘ) 袖口に袖口布をつける場合は、袖口は毛抜き合せにして、袖口下に衿のやうに四つ留を

第十三圖

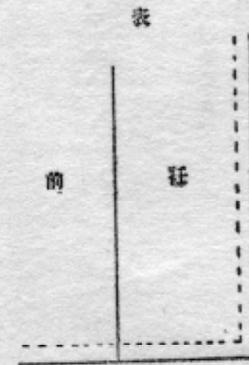
領線の標の付け方



領線仕立上りの圖



領線仕立上りの圖



して、袖口布のある間は四つ縫いにして、袖下を縫い終つてから、袖口布の廻りを折つて五分位の針目で締めます。

又袖口布を用ひない時は、袖口を木綿物より細く締めます。

(4) 本裁長着(毛織物)

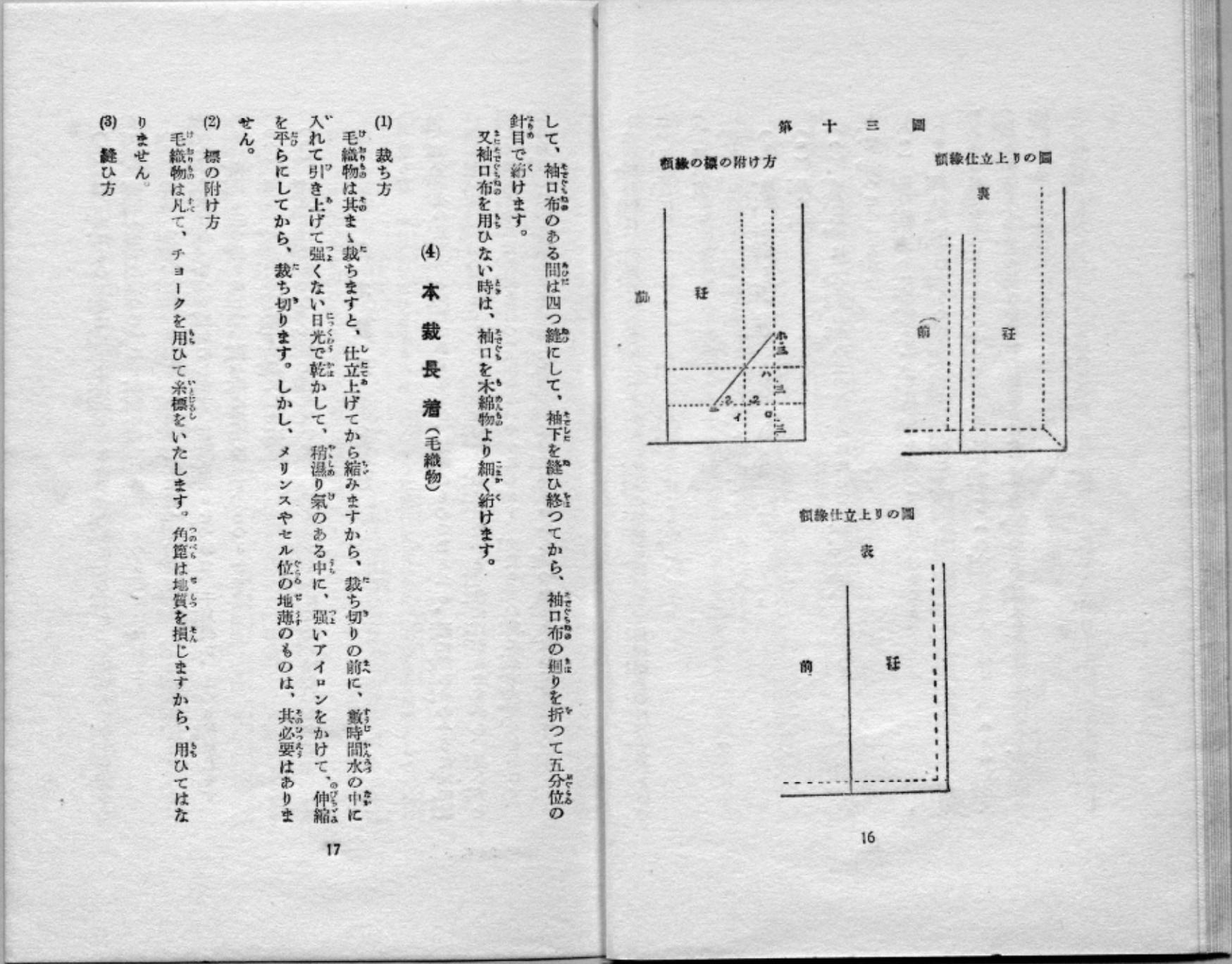
(1) 裁ち方

毛織物は其まゝ裁ちますと、仕立上げてから縮みますから、裁ち切りの前に、数時間水の中に入れて引き上げて強くない日光で乾かして、稍湿り気のある中に、強いアイロンをかけて、伸縮を平らにしてから、裁ち切ります。しかし、メリンスやセル位の地薄のものは、其必要はありません。

(2) 標の付け方

毛織物は凡て、チヨークを用ひて糸標をいたします。角筈は地質を損じますから、用ひてはなりません。

(3) 縫ひ方



(イ) 袖 地厚ものゝ時は袖下は淺縫をしないで、内袖になる方を二分位控へて袖下を縫つて袖口下、袖下(袖下は折つて)に千鳥掛をして、袖口はまつり衿にいたします。

(ロ) 背縫 脇縫、衿附、袖附等は全部半返しに縫つて、衿附を除く外は皆平焙邊で割つて、縫代を千鳥がけか、まつり縫かにします。衿附は折りをつけて、千鳥掛か、まつり縫にします。袖下、裾縫も三つ折りにして、裾の角は額縁にして、まつります。

(ハ) 肩縫 肩敷當の下は千鳥掛にします。

(ニ) 仕立上げましたら、全體に霧を吹いて強いアイロンをかけて仕上げをします。

### (5) 本 裁 長 着 (薄地物)

#### (1) 裁ち方

木綿や絹布の裁ち方と同じであります。薄地物のものであるから、殊に錦紗等のやうに地に絞のあるものは、絞がのびますから、布地を丁寧に取扱はないと寸法に狂がきますから、熨み方を正しく要所々々には待針を打つて動かないやうにします。又裁ち方の前に必ず火熨斗をかけて、折目を直してから裁ちます。而して絹布類は、丈が長いから残つた布を取つて背伏せの布に用ひ

ます。若し布巾の廣いときには、衿と袖の間から丈つぎなしの背伏せの布をとりまします。

#### (2) 標の附け方

焙邊寬か糸標をします。

#### (3) 縫ひ方

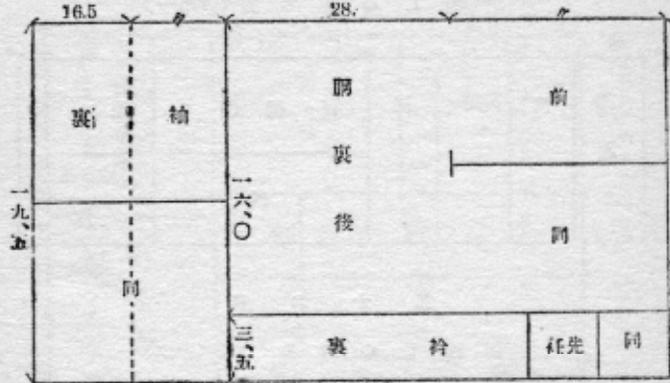
(イ) 袖 袖口布を用ひますものは、衿のやうに袖口を合はせて、毛抜き合はせとして、袖口下に四つ留をして袖口布のある間は、四つ縫ひにします。袖口布の端は先に折れるか、まつり縫にします。又袖口布を用ひないときは、袖口は摺り衿にいたします。

(ロ) 身頃 薄地物は肩當を用ひないで、月形に切つた共布か、薄地ものを、衿附けのときと一緒に縫ひつけます。背縫は共布か又は薄地の別の布を五分位の中に裁つて、背縫をするときに三枚一緒に縫つて、あて布の端を折つて伏せて折ります。又場合に依つては、耳を其のまゝ縫ひにするか、耳を裁ち切るかして袋縫にします。

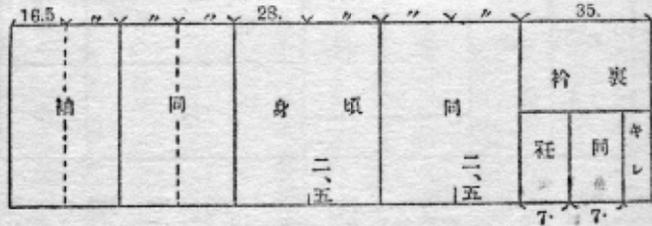
脇縫も細かに縫つて、其れから又一分先きを今一本縫つて、其の縫目から平焙邊で下まで割つて、縫代を折つて折ります。

衿附は前巾の衿附の標より二分先きを折つて(袖附の折り附けの様に)衿の布と三枚にして衿

第十四圖  
開裏の裁ち方(大巾物)



開裏の裁ち方(並巾物)



裾廻しの用布は、一反の凡そ三分の一、即ち(三米四〇釐)ち九尺位をつけるのが普通です。そして裾廻しの丈は身丈の三分の一位、腰襷は衿丈の三分の二位の丈にいたします。袖口布は布の充分にあるときには、袖口布を別に取つて四つ割一つの中を用ひますが、充分に布のないときには前巾から取りまします。但し裾廻しの丈が

附をして、折りは衿の方に返へして縫代を給けます。

(ハ) 衿下布、裾廻り 絹布の時のやうに額縁を作つて、衿下、裾に鉄をかけてから給けます。

(ニ) 衿附 衿肩廻りの裏衿附のところは月形の肩當をつけて、衿附をします。もし衿が餘り薄い時には、表衿に最初透いて見えないやうな布で、裏打ちをすると衿がしつかりして宜しいです。三つ衿も少し地厚な布を用ひます。

(ホ) 袖附 絹布と同じです。

(ト) 仕上げ 仕上げに火熨斗を用ふる時は、必ず薄い布で覆ふてかけなければなりません。火熨斗を直ぐにあてますと、光つて見苦しくなります。

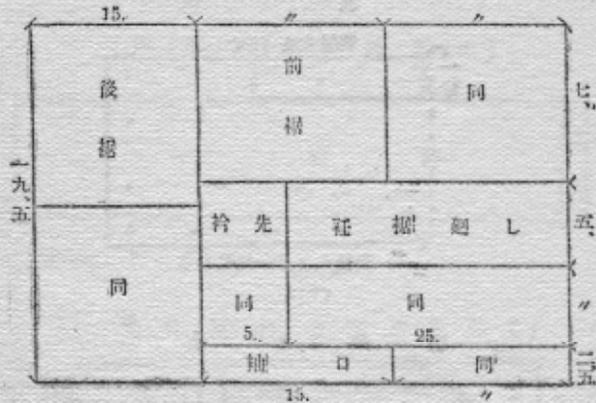
(6) 本裁女物衿

(1) 裁ち方

表の裁ち方は、本裁女物と少しも變りがありません。又裏も男物のやうに通し裏にするときは、表と同じ裁方にして身丈を二寸位長く裁つて、仕立替の便利のため、肩で揚をしておきますが、女物は裾廻しをつけるのが普通であります。

第十七圖

裾廻しの裁ち方(大巾物)



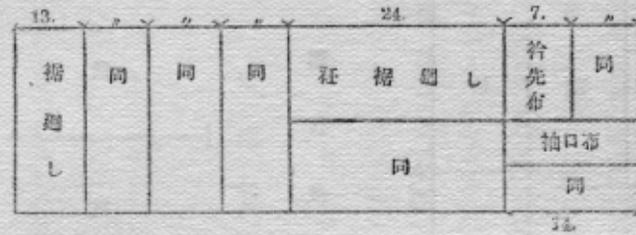
巾の半分迄は表袖丈と同じにします。(四種) 一分詰めて標をつけ、袖巾は表と同寸にします。

2 身頃 表は単衣と同じです。

裏身頃の胴裏は表身頃と同じに、肩を右に背を手前に、中表に二枚重ね、裾廻しは後身を上に前身の分を下にして胴裏に重ねて、表身丈より出批の二倍丈長い寸法に、胴接ぎの標をつけて、後胴裏に後裾廻しを、前胴裏には前裾廻しを別々に重ねて、待針で押へて表と同じに後身頃の標をつけて、後身を左に取り除き又、表身頃と同じに前身頃の標付けをします。但し裏身頃の中は標は、表身頃の中を二、三ヶ所測つて其寸法と同寸に標をします。

第十五圖

裾廻しの裁ち方(其一)



第十六圖

裾廻しの裁ち方(其二)



袖口丈に不足の場合には前巾から袖口布は取られませんが、衿先の布は五寸でよろしいのです。

(2) 女物衿普通仕立上げ 寸法 大體は女物單衣と變りません。

(3) 標の附け方 1 袖 表袖は單衣物と同じです。裏袖には袖口布をかけて、一分詰、丈で(但し袖袖口批 五(二種) 八型) 分 二

第十八圖(二)

(4)

衿(裏表四枚重ねて)



(5)

衿(裏衿を下に重ねて)



3 衿 表、裏別口に、各々中表に重ねたものを四枚重ねて、裾を右にして裏を出衿の二倍長として単衣と同じに標をつけます。そして、表衿二枚を取り除いて、第二十圖(2)のやうに裾の標をします。

4 襟 イ、ロは出衿の二倍、ロ、ハは出衿の三倍、ロ、ニを出衿の寸法丈にして、軽く標をつけて襟の形をつけます。

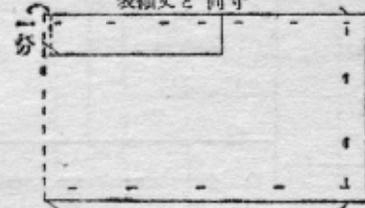
5 衿 衿先の布と、衿裏とを、接ぎ合せの標をつけて其上に中表にした表衿を山を右に、衿附を手前にして、山、丈附、巾の標をつけます。

第十八圖(一)

(1)

裏 袖

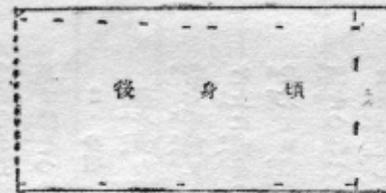
裏袖丈と同寸



表袖丈より一分詰める

(2)

裏 後 身 頃



表身丈より裾廻し丈を減じたもの

裾廻し丈を測る

(3)

裏 前 身 頃



表身丈に出衿の二倍を加へたもの

(4) 縫ひ方

1 袖 裏袖に袖口布をかけて、袖口明の處の裏袖と袖口布とを合せて袖口布を釣らして、鉄をかけます。次に袖口明の表、裏を合せて袖山、袖口明に待針を打つて、弛み加減を見ます。縫代は表袖を真直に、裏袖の袖口明の處は縫代に袖口裾の二倍を加へた深さの處に待針を打つて、袖口明から二分位の間で、裏袖口を襷形に縫ひますと、袖口が綺麗に出来きます。そして弛み加減に袖口明から七八分の間は表袖を弛めないで、其れから上で表袖を弛めます。袖口を縫つて、平烙縫をかけて一分弱のきせをかけて表に折り、口下に四つ留をします。

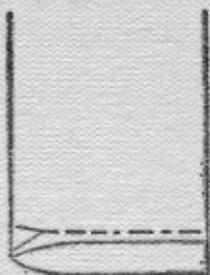
四つ留の仕方

右袖、袖の表を出して、袖山を右に、手前表袖口のきせ山から針を出して、袖口裾を手前も向ふ側のも裾山を抄つて、針を貫いて向ふ側表袖口のきせ山を袖下の方に、即ち布を縦に二厘位抄つて、最初に出した表袖口のきせ山に二厘位下に針を出して、裏で糸を結びます。左袖は表にかへした袖口の袖山を左にして、右袖と同じやうに留めます。

次に袖口下の外袖の表裏を自然に斜に折つて、裏袖を弛め加減に袖中の二分の一位迄四つ縫をします。其れから先の袖巾は、表、裏を別々に縫つて、表袖の方に折りをつけて、振り八つ口を、

縫ひます。振り八つ口も、表を袖下から一寸位の間で、裏袖の縮れない程度に弛めて、半分を縫つて表に返して、又半分を縫ひます。折りは表袖の方にします。

第十九圖 襷の出来上り圖



2 身頃 表身頃は全部標の外側を縫つて、背縫、脇縫、衿附をして、脇は單衣のやうに割つて鉄をかけます。裏身頃は、裾廻し付けを全部してから、身頃は標の内側を縫つて矢張り衿附迄します。脇を割つて鉄をかけることは表と同じです。表、裏共縫ひ終つてから丈比べをして裾を合せて、襷をあげます。襷の揚げ方は次のやうにします。

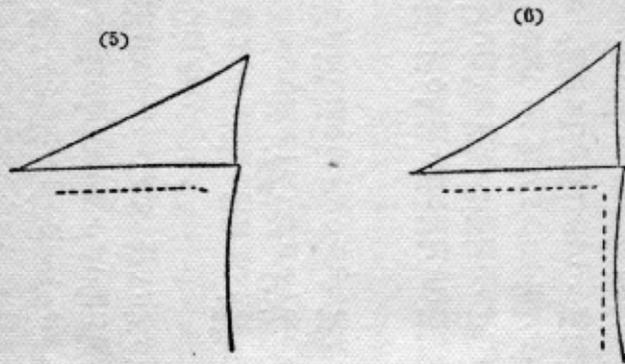
(1) 出裾の二倍裏を長くします。

(2) 衿巾に出裾の三倍に標(ノ、ハ)をして、イ、ハに斜線を引いて、其の中間に斜線から出裾の標をして、イからハに襷形を標します。

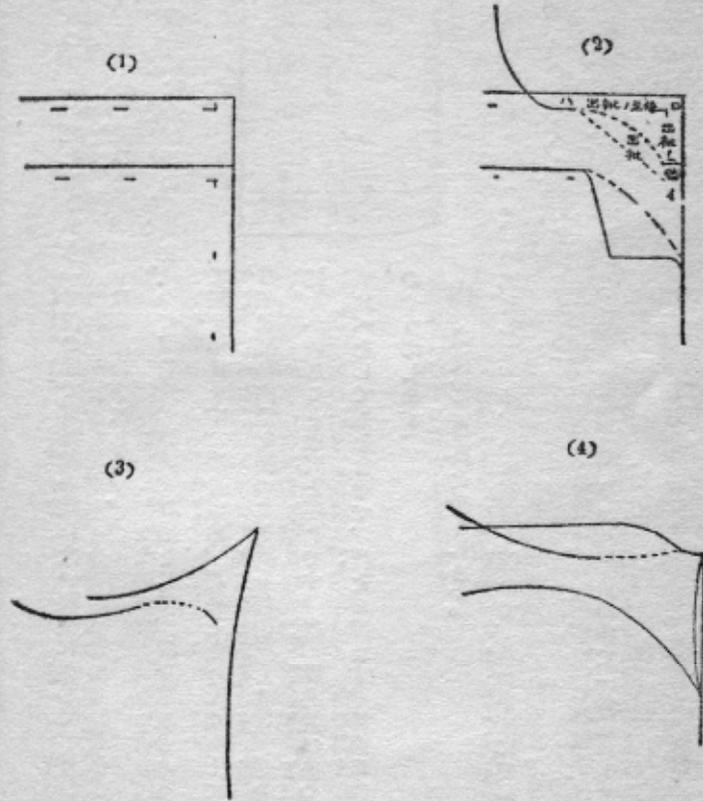
(3) 其襷形を木綿の鉄糸で細針に出裾の四倍迄縫つて、最後の針目の處で一針返へして三圖のやうに縫ひしめます。

(4) そして四圖のやうに出裾の大きに、布が落ちつく迄糸を引きしめます。

第二十圖(二)  
一の標附及び揚げ方



第二十圖(一)  
一の標附及び揚げ方



(5) 表衿の標と衿中の標を先づ合はせ、又袷形の間に三本位、表の縫目の曲がらないやうに待針を打つて、袷先から待針を一本づゝ立てながら、一針ぬきに袷形の間丈一分位の針目であらうく、其他は普通の針目に縫ひます。そして縫ひ初めの糸は、二寸位結び玉を作らないで、残しておいて、全部裾合せをすませてから、残した糸を別の針に通して前にあらく縫つた其上を、更に小針に袷形の間丈縫ひます。

(6) 袷先は、圖のやうに袷形の縫目から一分、又其の處から衿下の方に一分離れた處から衿下を縫ひますと、衿下には裾に一分、衿にも一分のきせがかゝります。そして出来上り圖のやうに襷をかけます。次に表に裾の折りをつけて、表から襷をかけて出衿を定めて、更に一本襷をかけます。

3 中とち、表、裏の背縫と裾の出衿とに待針を打つて、其間を木綿糸で五分位の針目で背とちをします。次に脇及び衿とちも同様に行なひます。

4 袷先を一寸位縫つて、表にかへして襷をかけてから、衿下を其糸で續けて縫ひます。

5 身八ツ口縫 後八ツ口の標を合せて、標より一分先きを縫つて、折りは表に返へします。

其れから身八ツ口に四つ留をします。表前身頃から後表裏身八ツ口のきせ山を抄つて、裏後身頃

の身八ツ口を縦に少し抄つて糸を引き出して裏、表前身の身八ツ口のきせ山を戻つて、表前身八ツ口の初めの針より少し離れた處に針を出して、初めの糸と結びます。四つ留をしてから、前の身八ツ口の標を合せて、標より一分先きを縫つて、表に返へして襷をかけます。

6 袖附 袖山と、身頃の肩山とを合せて待針を打つて、袖附の四つ留をします。四つ留は、身八ツ口の四つ留と同じです。即ち表袖、表裏身八ツ口、裏袖の順序に抄つて、糸をひきぬいて反對の順序に糸を戻して、表袖の處で糸を結びます。袖附は、四つ留から二針、三針は半返へしにして、袖山も一針返へします。表袖附が出来てから裏の袖附をします。

7 衿附の表裏の標を合せて、襷をかけて、最初に表衿の待針を打ちます。其要領は單衣と同じであります。表衿の待針が打てゝから、裏衿をつけて待針を打ち直して、衿をつけます。衿附がすみましたら、衿に平端銀をあてゝ、衿先を衿附の抄ひ留から、二分位はなれた處を衿巾だけ縫ひます。そして折りは衿下の留を一つばいに表に折つて留めておきます。次に三つ衿に芯を入れて、表衿の方に全部の縫代を入れて、巾の標通りに襷をかけます。次に裏衿は標より二分ひかへた寸法に折つて、襷をかけて、衿先は圖のやうに袷形を作つて、表、裏の衿を合せて更に襷をかけて衿紵けをします。共衿は單衣と同じにかけます。

8 裾とち 衤に三針、前身頃に三針、後身頃に四針、又衤、脇、背の縫目々々に一針づゝ出します。表の前身頃、後身頃には、其間々に更に一針づゝ出します。そして裾とちの針数は必ずこれによらなくても宜しいのであります。身頃の廣いときには針数を澤山出します。凡て裾とちをします時は、裾全体の長さより二寸位長く糸をつけて、とちる時に糸のつらないやうにします。又糸は中途で續いではいけません。

9 仕上げ 木綿物は押しをかければ宜しいですが、絹布は火熨斗仕上げをします。

### 本裁男物袴

#### (1) 裁ち方

表の裁ち方は本裁男物単衣と同じであります。裏の裁ち方は通し裏のものは表身丈よりも二寸位長く裁ちます。但用布が不足の時は衤は釣裁ちとします。裾廻りものは、女物袴裏の裁ち方と同じであります。

袖口布は重は黒八丈、瓦斯八、洋八、五日市、瓦斯五日市等を用ひます。

#### (2) 普通仕立上げ寸法

袖口衤、五厘 裾衤は一分にする丈で其他の寸法は単衣の寸法と同じであります。

#### (3) 標の附け方

1 袖 表袖は単衣と同じです。裏袖は女物袴のやうに、袖口布を裏袖の上に乗せて、表と同じやうに標をつけます。袖巾の不足の時は、袖口の方に別布を重ねつきにして足します。

2 身頃 表は単衣と同じで、裏身頃は肩に揚の標をつけてから、背、後巾、袖附等の標を附けます。

3 衤 女物袴と同じやうに、表、裏を中表に重ねて、裏は出衤の二倍だけを長くして、衤の標附けをします。

4 袴 単衣物と同じであります。

#### (4) 縫ひ方

1 袖 裏袖に袖口布をかけて、表裏の袖口を合はせて、表に折りをつけて、袖口下に四つ留をして、袖口下を裏を弛め加減にして四つ縫を袖下迄します。人形は表、裏別々に縫つて表は表の方に、裏は裏の方に折りをつけて、袖を先に人形を後に折りをつけて角でとめます。そして表に返へして標をかけます。

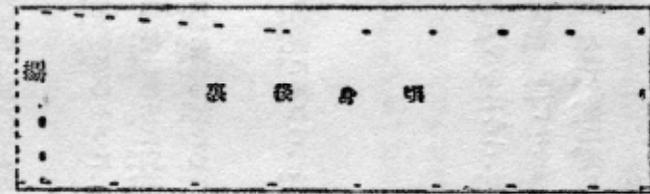
第二十一圖

(1)

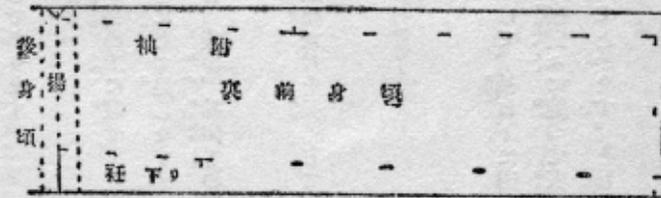


袖巾の不足の場合は袖口の方に  
重ね接ぎにして布を見す

(2)



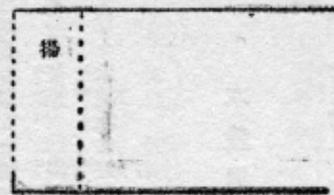
(3)



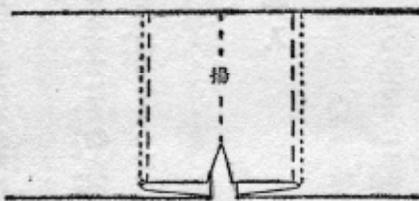
2 身頃 表身頃は女衿と同じやうに、背縫、脇縫、衿附を單衣と同じにして、脇は單衣の時  
のやうに割つて袂で押へておきます。

第二十二圖

(1)



(2)



裏身頃は圖の(1)のやうに標を合はせ  
て、衿肩の裁ち切り丈の寸法を残して、  
(2)圖のやうに兩方に開いて、かくし袂  
をかけます。そして表と同じやうに衿  
附迄をします。  
(3) 裾合せ 表裏の丈比べをして、  
襷を揚げて裾を縫ふ事は女物と少しも  
變りありません。  
(4) 中とち 背、脇、衿の中を木綿  
糸でとちます。

5 襷先を縫つて、衿下を縫つて袂をかけます。  
6 袖附 袖山と肩山を合はせて、待針を打つて袖附に四つ留をして、袖山で一針返へして袖

附の留際から七、八分の間は半返へしにします。

7 衿附 表、裏の衿附の標を合はせて、假縁をかけてとちてから衿附の待針を打つて、單衣物と同じ要領で衿附をします。次に三つ衿に芯を入れ、衿先に留をして衿巾を定め縁をかけて締めます。共衿掛も單衣と同じです。

8 裾とち 衿裾、前巾、後巾のとち方は女物と同じです。

9 仕上げ 木綿物は押し上げを、絹布のものは、火熨斗をかけて、不用な縁糸は全部取りま

### 本裁男物綿入

(1) 裁ち方

表の裁ち方は男物單衣と同じく、裏の裁ち方は男物衿と同じであります。

(2) 普通仕立上げ寸法

袖口 襷 (四釧) 一 分 (四釧) 襷 襷 (六釧) (八釧) 一分五厘——二分

(3) 標附け方

1 袖 標の附け方は衿と異りません。只巾や丈の詰め方やのばし方が違ふだけです。即ち裏袖の袖口下の縫ひ込みは、袖口の襷の二倍に袖下の縫代を加へた寸法の五分とし、袖口明は表袖口より一分詰め、袖巾は五厘つめますが、袖口明迄の袖巾は袖巾に袖口襷を加へたものでなければなりませんから、裏袖の袖附は少し曲ります。

2 身頃 本裁男物衿と全く同じです。只出襷が大きいから、それ丈裏の丈が長くなる許りです。

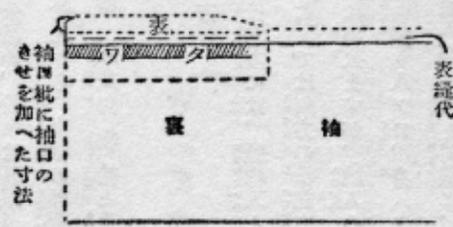
(4) 縫ひ方

綿入の仕立方には、縫綿入と、縮綿入とありまして其の仕立方に依つて、縫ひ方順序も違ひますから、ここでは両方の仕立方を簡単に記しますが、縫ひ綿入は、袖口、振り八ツ口、身八ツ口等が綺麗に出来ませんが、綿入のとき馴れない者は入れにくいですし、縮綿入は、綿は入れ易いですが、袖口振り八ツ口、身八ツ口等は綺麗に縫ひにくいです。

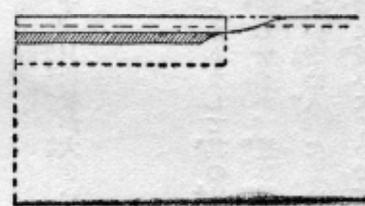
1 縫綿入袖 衿と同様に、袖口を合はせて袖口に四つ留をしてから、表裏の袖下を別々に縫ひます。そして袖口に綿を含めます。綿は一寸位のも一枚、五分位の中のものを入れます。綿の長さは袖口明の寸法より一寸位長く作ります。袖の凡そ真中を圖のやうに裏袖を出して袖口山

は袷の様に縫ひ、其縫目に五分位の綿を、一枚開いたまゝとちつけて、表にかへして裏をかける。振り八ツ口

第二十三圖  
縫綿入袖口綿の含み方

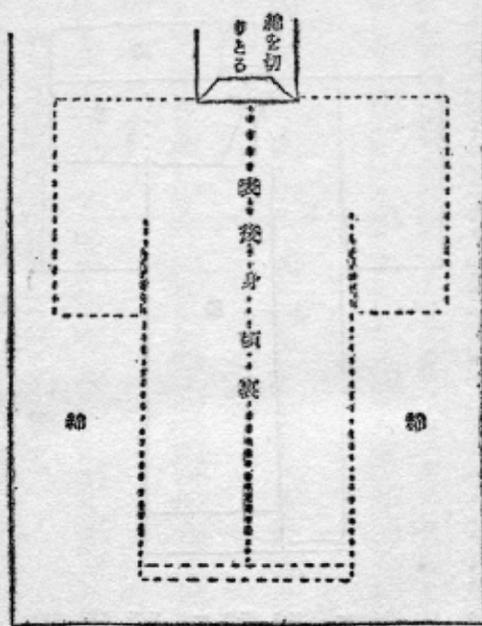


第二十四圖  
紵綿入袖口綿の含み方



を左に、綿を裏袖口の山に含めて表袖の裏を袖口明の縫目から、出衤と袖口明のきせを加へた巾に後に打つて、綿を含めながら袖山迄表袖も一所に待針で押へてから、今打つた待針を一本づゝたて、表袖だけをはづして待針を打ち直し綿をとぢます。先づ袖口明際に一針、二分離れて一針其れから又五分はなれて一針、袖山から又五分はなれて一針、其の間は三針か四針等分に出します。もう半分の袖口も布を折り直して、同様に含み綿をいたします。そして表から裏をかけておきます。振り八ツ口

第二十五圖  
後身頃に綿を入れる



2 身頃 身頃の縫ひ方は、縫綿入も紵綿入も、背、脇を縫つて、衤を付けて衤合せをするのは同じです。たゞ縫綿入は袷のやうに身八ツ口を縫つて直ぐに綿を振り八ツ口のやうに入れて

から四つ留をして前の八ツ口を縫ひます。其他は同じです。

3 袖附 衤附、縫

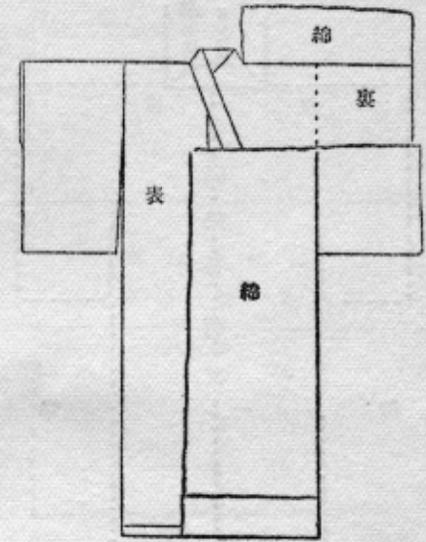
綿入は、身八ツ口を縫つてから直ぐに、衤のやうに袖附に四つ留をして、袖を表、裏別々に附けてから、表、裏衤をつけます。

(4) 綿の入れ方

縫綿入の場合、表裏の背縫を合はせて、衤衤を定めて、表の前身頃、裏の前身頃をよく重ねて、

裏糸で一吋開かぬやうに留めておいて、中側に這入つてゐる表の後身頃、外袖を出してから縮入をします。

第二十六圖  
前身頃に綿を入れる



振り八つ口と身八つ口、衿肩明の處の綿を切つてから、眞綿を更に其上に引いて、袖下、肩の綿の餘分を前身に廻してから、袖下と兩脇縫を中に入れて取つて、裏前身を上に出して、眞綿を引いて脇縫と袖下をとちます。其れから後、綿の残り全部前に廻して、綿の不足の處に綿を足して、

表後身頃、表外袖に眞綿を引いて、綿を裾に二寸位長く出して、綿の中心を背縫に合はせて綿をおきます。裾は綿を一吋五分位のもの一枚と、五分位のもの二つに折つて、裾より稍長めに、批綿を置いて、先に残しておいた綿を批綿の上に被せて、

て、裾に假緩をして、綿を中にはさんで裾をとちます。次に裾先を一吋五分許り裾と同じに縫つて、よく綿を入れて裾先を作ります。

次に衿下に含み綿をして、衿下の留め際に一つ、其の上、下に一つ宛、都合三針、針目を出して、其れから下は裏糸で含み綿をして、表の衿下と一所に更に鉄をかけます。縫縮入は、次に衿の中とちをして、衿先に衿と同じ留をして、衿先を縫ひ廣衿は表衿、裏衿に鉄をかけて、衿約をします。

次に共衿をかけて、衿と同じ針數に裾とちをします。其の時糸のつれないやうに殊に注意します。

次に背と脇の縫目を見て、裾から身丈の半分位の長さ丈、表に出さぬやうに五分位の針目で縫目を抄つてとちます。

(2) くけ縮入 縮縮入にも、振り八つ口、身八つ口等を縫縮入と同じに縫つてする方法もありますが、こゝでは全部約ける仕立方について記します。

疊み方 表、裏の身頃を續けて引き延ばして、前身頃を上にして町等にたゝんで、兩袖も身頃に重ねて、裏身頃から一尺位の丈に肩から疊んで、表身頃も半分程同様に疊んでから後身頃を出

します。裏はそのまゝにして、表の後身頃から、縫縮入の時と同じに眞綿、綿、眞綿の順に入れて、批綿も入れてから裏の後身頃を其上に載せませす。

次に下前、前身頃の裏に綿を入れて表下前身頃を被せて、上前も同様に入れます。

(3) 綿入が済みましたら、先づ裾の假綴ちをして、襷先を縫つて紵ける事は縫縮入と變りません。

次に袖口に圖のやうに含み綿をします。綿の厚さは好みに依つて二枚なり、三枚なりを用ひます。先づ、袖口山に縫標をつけて、綿をゆるめ加減に含み綿をします。針目は袖口留際に一針、(二・八種)袖山から一分離れた處に一針、其の間に三針を出して、其中間は綿だけを抄つて含み綿をしてから紵けます。袖口の留は、表内袖のきせ山から少し遣入つた處から針を出して、表外袖に出して、裏外袖の袖山を抄つて、裏内袖の批山を縦に抄つて反對に戻つて、表外袖の初めに出した針目から縦に抄つた丈をはなして、初めの糸と結びます。袖口に留が出来ましたら、留際から二分の間は表袖をやゝ釣り加減に、それから七、八分の間は表を弛めない程度に、それから上は表を弛め批に縮みの出来ないやうに躰をかけます。そして先に留た糸を續けて、袖口批の間は、綿を少し抄つて、其他は綿を抄はぬやうに細かに紵けます。

又振り八ツ口は、綿を一枚を二つに折つて、振り八ツ口に含めて一寸位の間、間に針目を出して、含み綿をします。

身八ツ口にも、振り八ツ口と同じに含み綿をして表と合はせて、躰をかけてから紵けます。衿其他は、縫縮入と同じであります。

### 中裁小裁長着

#### 四ツ身單衣

##### (1) 裁ち方

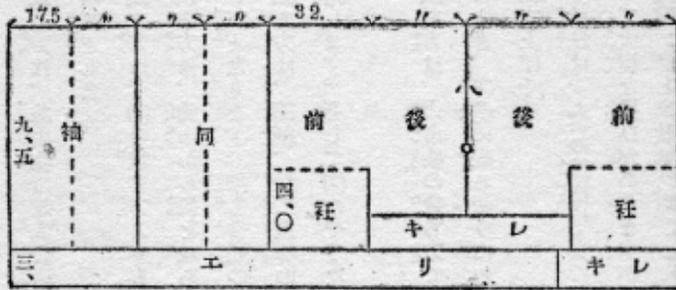
四ツ身は、六、七歳から十二、三歳迄の子供の着るによい大きさの着物でありまして、用布は、袖丈の四倍と身丈の四倍を要します。

又裁ち方には、摘み衿裁、逆衿裁、車裁、前衿裁、中巾裁、大巾裁等の種類がありますが、最も普通の裁ち方は摘み衿裁であります。

第二十七圖(二)

四つ身裁ち方(中巾物裁ち方)

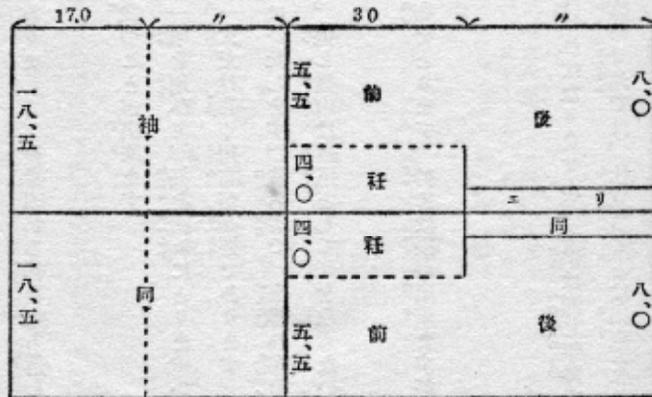
(4)



(公式) 袖丈×4+身丈×4=總用

四つ身裁ち方(大巾物裁ち方)

(5)

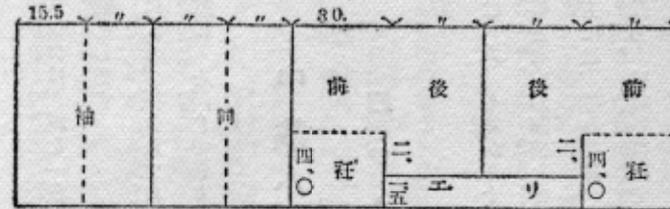


(公式) 袖丈×4+身丈×2=總用布

第二十七圖(一)

四つ身裁ち方(横み衽裁)

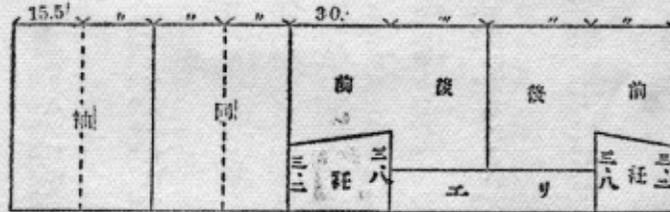
(1)



(公式) 袖丈×4+身丈×4=總用布  
(總用布-袖丈×4)÷4=身丈

四つ身裁ち方(逆衽裁)

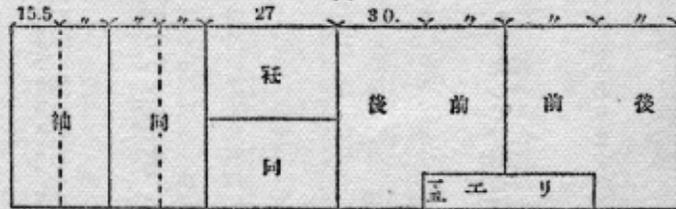
(2)



(公式) (總用布-袖丈×4)÷4=身丈

四つ身裁ち方(前裁)

(3)



(公式) (總用布-袖丈×4-衽丈)÷4=身丈

(1) の裁ち方は、並巾物で最も普通に使ふ裁ち方でありまして、後身頃から衿を裁ち落して、前身を揃み衿とします。

(2) の裁ち方は、(1)の裁ち方よりも、前身巾を少し裁つことが出来ます。

(3) の裁ち方は、前巾から衿を裁ち落して、後巾は一巾を用ひて、衿を別々にとりますから、身巾の広い衿となります。即ち普通の四つ身よりも衿一丈だけ長く用布が必要であります。

(4) の裁ち方は、縮緬、羽二重等の巾巾物を裁つ時にいたします。裁ち方で、全體の布巾から衿を裁ち落します。そして(1)のやうな裁ち方をします。但し後巾は縫込として切を取らないでもよいです。

(5) の裁ち方は、大中物の裁ち方で、後身から衿の布をとります。衿には接が出来ますが、それは標附のとき、下前に来るやうにします。

(2) 普通仕立上げ寸法

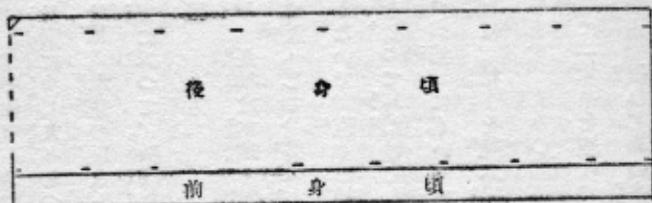
仕立上げ寸法は、子供の體格によつて、適當に定めなければなりません。子供は同じ年齢でも、體格に依つて大變な違ひがありますから、なか／＼一應の寸法では、仕立ることは出来ませんが、ら、左の寸法に依つて酌せねばなりません。

袖	丈	(長袖)	一	(五五釐—六〇、七釐)
同		(元袖)	八	(三〇—三〇)
同		(筒袖)	七	(二六、五釐)
身	丈		七	(一三六釐—一四三、五釐)
後	巾		三	尺—三、二寸
前	巾		七	(二六、五釐)
身	八ツ		一	つばい(四寸五分—五寸)
衿	肩		二	(九、五釐)
衿	明		一	寸六分—一、七釐
衿	下		一	(四、五釐)
衿	巾		一	(四、二五釐)
衿			一	(四、九、五釐)
衿			一	尺—三、五寸

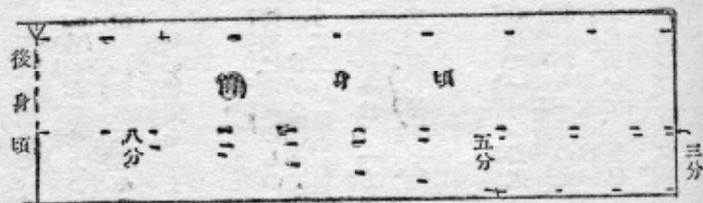
(3) 標の附け方

1 袖(筒袖) 標附の順序は、本裁と同じであります。筒袖は袖下の斜線の中央で、三分が、五分出して、丸みをつけても宜しいです。

第三十一圖  
身頃標附(1)



第三十二圖  
身頃標附(2)



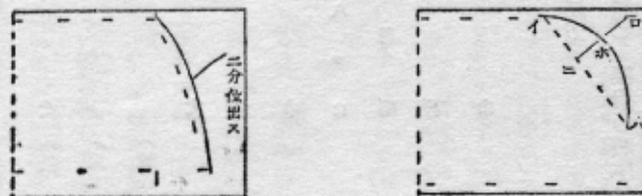
元祿袖、袖口下から七、八分真直にしたイ點と、袖下の口と、イ、ロよりも一寸長いハ點と、イ、ハの斜線の中央の二點と、ニ、ロの中央ホとを定めて、イ、ホ、ハの曲線を形よく標附けます。

2 身頃 置き方は、本裁と同じでありますし又、其後身頃標附の順序も同じです。只寸法が違ふ丈であります。

前身頃、筒衿の標附方、衿肩明から真直に標をして、次に其標から裾で三分(標二)合襖で衿巾より二分計め、衿下りで八分計めて、其三つの點をつないで、衿附の標をします。

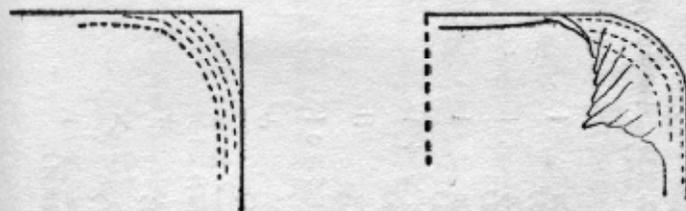
第二十八圖

袖筒 元祿袖

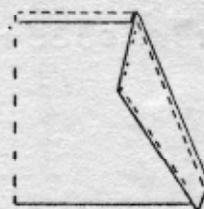


第二十九圖

元祿袖縫方 (1) 元祿袖縫方 (2)



第三十圖  
筒袖の縫方



衿附標、劍先から、衿下の標の間に斜線を引いて、劍先から二寸程下つた處で二分程衿巾を廣げて、衿附に少し丸みをつけますと、着物が着せよいです。  
3 衿附 本裁の單衣と同じですが、衿巾が不足の事が多いですから、衿裏をつけて、折りは裏衿の方に折つて、隠線をかけてから衿の標附をします。

(5) 縫方

1 袖 長袖は本裁と同じです。筒袖は地薄のものゝ時は淺縫をしてから、袖下を縫つて折りは内袖に返へして、出來上り圖のやうに一寸位の針目とちつけます。又地厚のものゝ時は、淺縫をしないで、直ぐに袖下を縫つて縫込みは、一方に返へさないで外袖の方にも返へして割つて、端を折つて耳納けをしておきます。但し袖下を縫ふとき袖口明の縫代は縫はないでおかないと、袖口が納けにくいです。

元祿袖は、袖下を縫ふ時、丸みの前後で一吋一針返へして、丸みの間は小針に糸をやゝ引き加減に縫ひます。丸みの縮め加減は、縫目から一分の處に一本、其れから三分の處に一本、又五分離した處に一本糸を續けて縫つて、糸を引いて、縫込を丁寧に落ちつかせます。そして襷を同じ方向に疊んで縫ひしめの糸で留めておきます。表に返へして襷をかけてから、袖口筋をします。

袖口筋は袖口の留より先には納けないやうにします。

2 身頃 背は大抵の場合の裁ち方は、後身頃から衿をとつてあつて、裁ち目になつておりますから、肩當、居數當の間を除いて、其他は全部袋縫にいたします。又肩當、居數當の附け方は本裁と變りません。

次に脇を縫つて衿は身頃を手前にして、摘み衿の標を合せて待針を打つて衿を摘みます。衿下筋、裾筋をして衿附をします。衿附は少し丸みを持たせて附けるのですから、本裁の様に衿を釣り加減に附けることは出来ません。

3 袖附 本裁と同じに袖をつけて、振り八ツ口と身八ツ口を耳納けにします。

4 揚 肩揚、肩巾の真中を山にして、筋だけに揚をします。揚は二本糸で、後は袖附迄、前は袖附よりも五分位上迄に、深さは揚の深さの三分の二位迄にします。

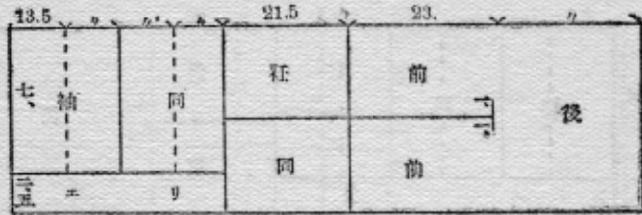
腰揚、身丈の十分の六の寸法を背から計つて、其れを揚山として矢張り二本糸で、縫目で一針つゝ返します。但し揚の分量の餘り多い時には恰好を見てしなければなりません。肩揚も腰揚も餘り多い時は二重にいたします。



第三十五圖

一ツ身裁ち方(別衽裁)

(1)



(公式) 袖丈×4+衽丈+身丈×2=用布

{ 總用布 - (袖丈×4+衽下り×2) } ÷ 2 = 身丈

(2) 普通仕立上げ寸法

袖	同	同	同	袖	丈(調袖)
口	(筒袖)	(元衽袖)	(元衽袖)	六寸五分	(二五釐)
三寸	六寸	六寸	六寸	一尺三寸	(五〇釐)
五分	三寸	三寸	三寸		

(3) 標の付け方  
 大體の標附は、四つ身と變りません。衽の標附のとき、衽巾が餘りせまってきた場合には、劍先から二寸五分位下つた處で二分か三分位衽附を出します。

(4) 縫ひ方  
 寸法が違ふだけで袷としての縫ひ方は、本裁の袷と同じ方法で宜しいです。

附紐の付け方  
 子供の着物には、附紐は是非着けなければなりません。其の付け方が悪いと、子供の發育を害する憂がありますから、附紐の位置は餘程氣をつけなければなりません。又子供は、年々に成長するものでありますから、時折紐を下げなければなりません。先づこの位の年齢としては、肩から六寸位の處が最もよいですが、これは勿論其の子供の體格によつて定めなければなりません。

一ツ身綿入

一ツ身にも大、中、小等大さに色々ありますが、其用布は凡そ一反の三分の一で裁つのを普通

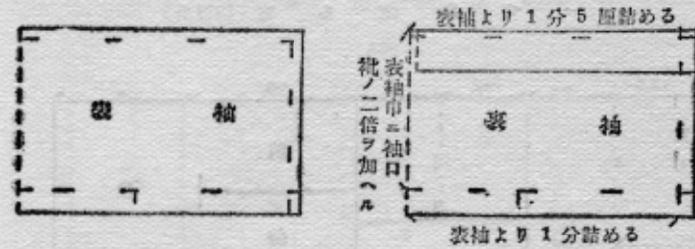
とします。

(1) の裁ち方は、袖巾から衽を取るのではありませんが、筒袖の場合は衽丈が不足ですから、(2)の裁ち方のやうに衽からも衽を續けて裁ち落します。

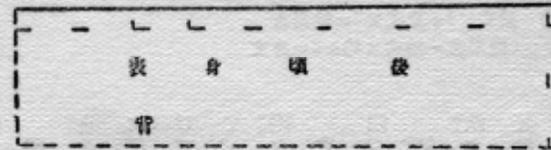
(3) の裁ち方は中巾物の時には布巾が広いですが、袖巾、衽巾、も充分にとれてよろしいですが、並巾の時でも、衽の布丈が別にいりませんから、用布が少なくて宜しいです。しかし鈎衽裁ですから、片面物には不適當であります。



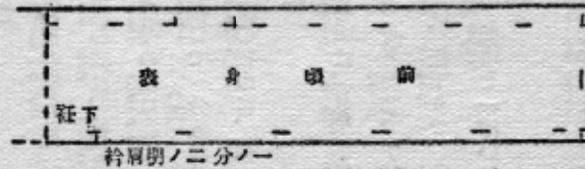
第三十八圖



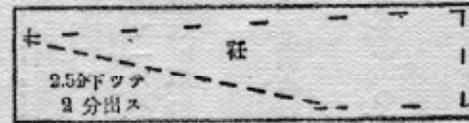
第三十九圖



第四十圖



第四十一圖



先が細くなりますから、釦先から二寸五分位下つた處で二二分衿巾、くします。又衿紐の時は、釣下の長い短いによつて、標附の順序を前後しなければなりませんし又衿下は布目を眞直に出来なない場合もあります。

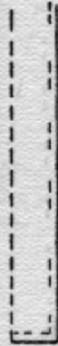
第四十二圖  
女兒の附紐



(4) 縫ひ方

標通り表、裏を縫つて、縮入をします。古縮を用ひます時は、前身頃の胸のあたりと、袖丈の眞中程を切つて、綿全體を廣げて入れます。其他は本裁の縮入と少しも變りません。裾とちは、前巾に二針、後巾に五針裏に出して、表は其の間、間に一針づゝ出します。

第四十三圖  
男兒の附紐



釦針の飾縁をかけます。又其の附け方は男兒は衿紐を下に、女兒は衿紐を上にして其位置は身八つ口の高さに附けます。

第四十六圖

本裁女物羽織裁ち方



(公式) (總用布-袖丈×4-肩丈-前後の差×2+繰越×2)+4  
=後身丈  
出来上り身丈+前後の差=前身丈

(1) 裁ち方  
袖丈の四倍に、肩丈を加へたものを總用布から減じて、前、後の差の二倍を加へたものを、四で割りますと、前身丈が出ます。後身丈は前身丈から、前後の差を引いたものです。袖口布と裾の布は前身から取ります。  
胸裏用布は袖丈の四倍に胸裏丈、即ち出来上り身丈から、表の返りを減じて、胸接ぎの縫代と肩の繰越しを加へたものを四倍したものです。  
衿肩明は、圖のやうに、二寸丈け眞直に肩山を切つてから肩山の方に五分、前身の方に五分の標をつけて、丸みをつけて切ります。

第四十五圖  
男兒の背守縫



第四十四圖  
女兒の背守縫



背守り縫

これも宮参りの着物には是非つけなければならぬものとされて居ります。其の縫

ひ方は紅白又は五色の糸で一年の月數になぞらへまして、十二針をういます。そして男兒は雌針を女兒は雄針を、衿附から四分程下つた所から下は身丈の三分の一迄、背縫の中心に、七針、又其れから後巾の半分の眞中に斜に五針縫つて、糸の残りは圖のやうに結んで置きます。

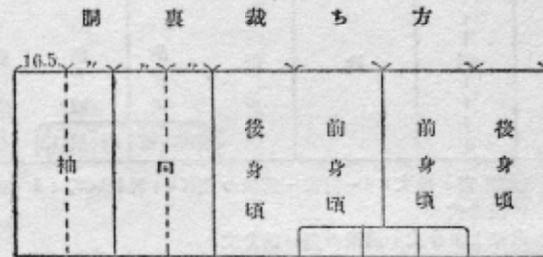
本裁羽織

本裁女物袷羽織

(2) 普通仕立上寸法

袖丈	袖口	袖巾	袖附	身丈	後巾	前巾	前下巾	襟巾	衿下巾	衿越	裾
着物と同寸	着物と同寸	着物と同寸	着物より五分多く (二廻)	着物の着丈の四分の三に一寸を加へる (四廻) (一七廻) — (一八廻) (四寸五分) — (四寸八分)	着物と同寸 (三廻) — (四廻) 七分 — 一寸	上五分 (二廻) 下五分 (七廻)	下五分 (七廻)	襟巾と同寸 (四四廻)	一尺一寸五分 (肩から) (二廻七廻) — (二廻七廻)	三 分 — 七 分	着物と同寸

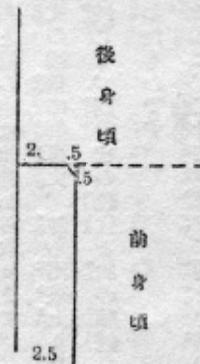
第四十七圖



(公式) 出来上り身丈 - (裁ち切り身丈 - 出来上り身丈) + 衿越  
× 2 + 開接代 × 4 + 袖丈 × 4 = 胴裏用布

第四十八圖

衿肩の裁ち方



凡て羽織の寸法は着物を標準として仕立てなければなりません。

(3) 標附け方

1 袖 着物と同じです。

身頃

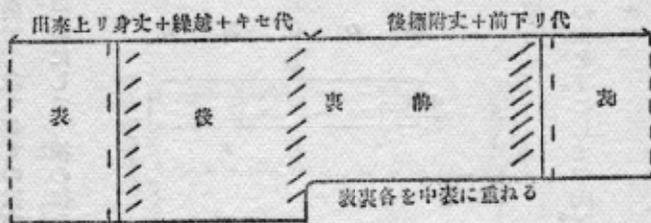
表裏の布を各々中表に重ねて、圖のやうに衿肩明を揃へて、肩山と前後の胴接ぎから、(十二釦) 上に襷をかけて、動かないやうにとめて、肩山の標をつけて、其處から、後丈は出来上り身丈に操越と胴接ぎのきせ代とを加へた丈に丈を定めて、胴接ぎの標をつけます。前丈は後の標丈に前下りを加へた丈にして、胴接ぎの標をつけます。

次に(2)圖のやうに、後身頃を出して、背、後巾、袖附、身八つ口の標をして、前下りの標をします。次に(3)圖のやうに、後身頃を左に取り除いて、衿附の標をします。衿附の標は紐下りを(二厘二舞)の縫代に、前下りの所は五分の縫代に定めて、其の間に尺度をあて、衿附の標をします。但し其の曲りはなるべく下の方で目立たない様にします。

襦の標附

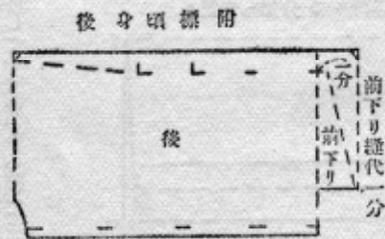
表裏を一枚づゝ中表に重ねたものを、圖のやうに置いて、胴接ぎ、袖丈、の標をつけて、襦

(1)

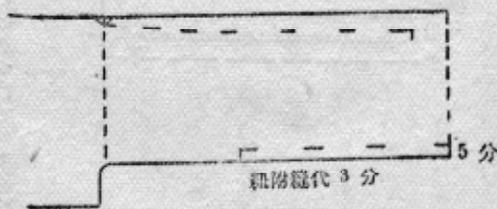


第四十九圖 身頃の標附け方

(2)



(3)

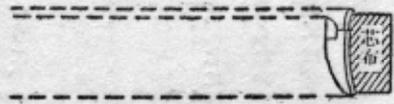


第五十一圖(二)

(3)



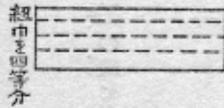
(4)



第五十二圖

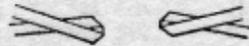
乳の作り方

(1)



乳の作り方

(2)

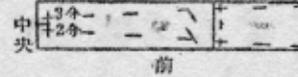


(2) 圖は衿附の標をイから三分に折つて衿附の標とし、又ロから三分に約代を標します。ハとニとの巾は、衿巾の二倍より一分少ないものとなります。

(3) 圖はハから衿巾に折つて、中に圖のやうに芯の布を入れて、鉄糸でとち附けます。

(4) 圖は(3)圖で折

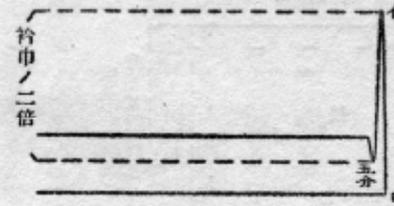
第五十圖  
襦の標附方



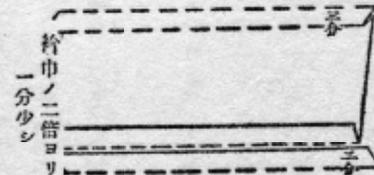
第五十一圖(一)

衿の折り方  
(1)

衿巾ノ二倍 = 5分加へて折ル



(2)



衿の標附  
布の表を下にして、折ります。

(1) 圖のやうに衿巾に五分加へてイ、ロを折つて、イから衿巾の二倍を更に

丈の所で、裁ち切りの襦巾の中央を標して、其所から後に三分、前に二分の標をつけて、下の襦巾は平均にして、襦の標をつけます。

つたものを、ハとニを突き合せたもので、衿付け代が、(四耗)一分だけ衿巾よりも狭くなつてゐるもの  
あります。

乳の作り方

(一耗五耗)(三耗)乳は四分巾八分の丈に切つて圖のやうに、巾を四等分して三本の線を引きます。そして其線か  
ら焙烙で折つて、疊みます。

(4) 縫ひ方

1 袖

裏袖に表布の袖口布をかけて、衿と同じに縫ひます。

2 身頃 標附のときの假とちを取らないで胴接ぎを小針に縫つて、胴裏の方に二厘位のきせ  
をかけて折ります。かくし襷は大人物にはせぬ方が宜しいです。

前下り、標の消えぬうちに前下りを縫ひます。前下りは、表は標より一分先きに出して、裏は  
標より一分控へて、標を合せて、巾から巾迄を布を延さぬ様に小針に縫つて、七厘位のきせをか  
けて、裏に折つて、隠襷を五分位の大きさにかけます。

次に胴接ぎの縫代をよく合せて、背を四つ縫にして、襷を入れます。但し裾に布又は眞綿を入

れる時は背縫の前に入れて鏡で押へて置きます。

次に襷の胴接ぎをしてから、襷上を縫つて後襷を左右入れてから、前襷を左右四つ縫にします。

次に衿と同じに前後の身八つ口を縫ひます。

3 袖附 袖附に四つ留をして、表裏の袖をつけます。

4 衿附 表は標の外を裏は標の内の衿附の標を合せて、衿附に假縫をします。そして紐乳を、  
裏側に衿附の標より一分奥にしつかりと縫ひ附けます。

次に衿の縫代の折り山より一分奥の所を次のやうなゆるみ加減に衿附をします。

背縫の縫代は五分か六分位にして、衿肩明の處は一分にして、衿肩明の三分の二位は眞直に、  
三分の一の間で丸みをつけて、衿を出来るだけ弛く、衿肩明から、紐乳の凡そ一寸上迄の間では  
衿を一分強弛めて、紐乳の上一寸と、下二寸位の間は衿をやゝつらし加減に、其れから下は衿を  
平均に待針を打つて、(六耗)一分五厘位の針目で紐乳まで縫ひます。紐乳はよく留めて、衿肩廻りは小  
針に衿をつけます。平焙烙をして一分のきせをかけて折りつけて、(一・二耗)三分先の衿先を縫つて、表  
に返へして縫代を留めて、衿代を折つて襷をかけて、衿けます。衿先の襷はどんな方法でもよろ  
しいですが、着用のとき迄取らぬから、他の襷より丁寧にかけます。

5 仕上げ

木綿物は霧を吹き押しをかけ、絹布類はアイロン又は火熨斗仕上げをします。但し火熨斗又はアイロンの仕上げの時は必ず布を當てゝからかけませんと、アイロンや烙熨のあとがつきます。

本裁男物袷羽織

(1) 裁ち方

裁ち方は女物袷羽織と同じであります。

(2) 普通仕立上げ寸法

袖丈	着物と同じ
袖口	着物と同じ
袖附	着物と同じ
袖	全部つける
身丈	(着物の着丈の四分の三に一寸を加へる) (四握) (一米五握内外)
後巾	着物と同じ

前巾	(一九握) 五寸
乳下り	(四五握) 一尺二寸
襦巾	(七・五握) 二寸
衿巾	襦巾と同じ
繰越し	(一握) 三分
裾	着物と同じ

(3) 標附け方

1 袖は女物と違つて總附になりますから、振り八つ口も人形もありません。袖丈の全部の長さが袖附となるのであります。

2 身頃

置き方、とち候のかけ方は、女物と變りません。襦丈は後身丈から袖附の寸法をげんじたものであります。

3 襦

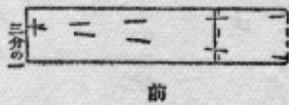
襦の標は、下は縫代を平均に、上は裁ち切り襦巾の三分の一を後襦に、三分の二の方を前襦に

します。

4 衿の標附も女物と同様であります。

5 紐も標附 折り方は變りませんが、黒み方は女物と反對に、下を先に上を後から折り疊みます。

第五十三圖  
襦 後



(4) 縫ひ方

1 袖 裏袖に袖口布をかけて、袖口を合はせて、袖口下から袖下を四つ縫にします。袖下は、袖の縫代の二倍は表、裏を別々に縫つて置きます。

2 身頃、胴接ぎ、前下り縫、背縫、前後襷附は女物と同じです。身八つ口がないのが違ひです。

3 袖附 袖山を合はせて、袖丈全部を附けますから、袖附に留をしなければなりません。留は裏表を一所に留めるときは七つ留ですが、大變むづかしいですから、表裏別々の留め方を致します。

留め方 表外袖附のきせ山から、表身頃のきせ山、襦の中央、表身頃のきせ山から、表外袖を

縦に抄つて、反對に戻つて、最初の針目より、縦に抄つただけはなして兩方の糸をしつかりと結びます。

裏袖の留は、襦を抄はぬのが違ふ丈です。

4 衿附 衿附も女物と同じです。紐乳は女物と反對に上から下に疊みます。

5 仕上げ

女物と同じであります。

本裁男物單衣羽織

男女の單衣羽織は、絹、紗、透綾、麻等の薄地物を用ひることが多いのでありますが、近頃は毛織物(セル)等を用ふる事が流行する様であります。斯様な厚地物で單衣羽織を仕立てます時には、肩のすべりをよくする爲に、羽二重や甲斐絹の肩すらしをつけた方が宜しいです。又薄地物の時には用ひない方がよいのでありますが、衿肩明に斜布をつけても宜しいです。

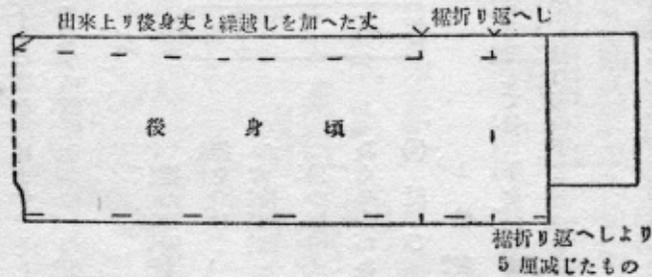
(1) 裁ち方

單衣羽織は袷羽織と違つて、襦の折り返へしが三つ折りになりますから、後身丈を裁つには、

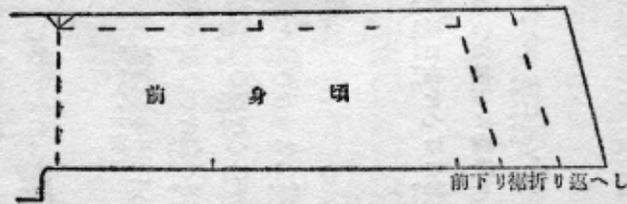
第五十五圖

標附け方

後身頃



第五十六圖



布丈を引いて、後身丈を出して、前丈は其れに繰越しの二倍と、前下りを加へたものを前丈とします。

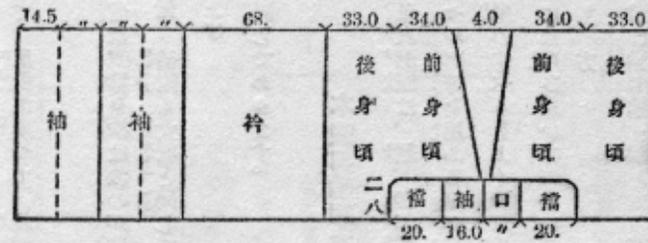
(2) 普通仕立上げ寸法  
單物袷羽織と同じであります。

圖の様に後身頃に標がつきましたら、裾の折り返へしを標通りに折つて、假に襷をかけて、後身頃を左手にはねて、前身頃の標をつけます。

後丈から前下り丈を袷附

第五十四圖

本裁單衣羽織裁ち方



(公式) { 總用布 - (袖丈×4 + 衿丈 + 補布丈) } ÷ 4 = 後身丈  
後身丈 = 出来上り後身丈 + 三つ山縫代 + 裾折り返へし × 2  
前身丈 = 裁ち切り後身丈 + 繰越し × 2 + 前下り  
脇丈 = 後身丈 + 繰越し  
補ひ布丈 = (裁ち切り袖丈 - 袖附 + 繰越し + 袖上縫代) × 2  
總用布 = 身丈 × 4 + 袖丈 × 4 + 衿丈 + 補ひ布

出来上りの身丈に三つ山の縫代と、裾の折り返へしの二倍を加へたものを裁ち切りの後身丈とします。

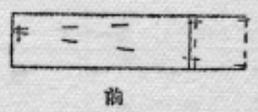
前身丈は後身丈に繰越しの二倍と、前下りとを加へたものであります。

用布の充分にある場合は襷を帷裁ちにしますが、用布の不足の場合は鈎裁ちにします。補ひ布丈は、袖口裁ち切り丈から、袖附の寸法を引いて、其れに繰越しと、袖上の縫代とを加へたものであります。

實際に裁ち切りますときは、補ひ布丈を出して、總丈から衿丈と補ひ

で下げて、前下りの標を附けます。そして後の裾の折り返へしと同じ寸法に折り返し、しの標をつけて、後と同じやうに假縁をかけ裾の折り返へしを留めて、脇縫の標を今一度折り返しにも通しておきます。

第七十五圖  
方 附 標



襦の標附も、襦上の縫代一分五厘と、襦丈と襦の折り返へし丈とに標をつけて、襦の折り返へしを襦で押へて左右の襦を中表に重ねてから、袷羽織と同様に襦附の標をつけます。  
 袷の標附は袷羽織と同じですが、特に丈の合標を五寸位置につけておく必要があります。  
 (4) 縫ひ方

1 袖 表袖口に袖口布をつけて袖口を縫ひ合せ、袖口下に四つ留をして、袖口布を隠して袖口下を縫ひます(最初に袖下に淺縫をしておきます)。次に袖口布の袖口下を縫つて、袖口布の下をまつり縫してから、袖口布を表袖に五分位の針目で縫ひ付けます。

2 身頃 背縫をして、襦上の縫代を三つ折りにして縫ひ付けてから前襦を附けます。裾の折り返

へしは三つ折りになる中の縫ひ込みは、山から二針、三針丈縫つて、全部縫はないでおきます。前襦が附きましたら裾の折り返へしを襦でさぢ直しておきます。

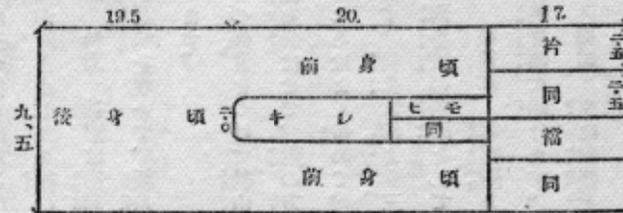
3 袷附 袷附は袷羽織の時には縫ひ袷にしましたが、單衣羽織は鐵砲附にします。前身頃を巻いて、袷糸で假とちをしておいてから附けます。袷附の要領は袷羽織の時と同じであります。

先づ紐乳をつけて袷山と背縫とを合はせて、袷肩廻りから待針を打つて、袷附と袷附の丈の合標を合はせて、附の方は標より一分先きを懸針をかけて、一分五厘位の針目で縫ひます。紐乳のところはよく留めて、袷肩廻り三寸位は、縮目の縫代をはなして、其處から袷を半分づゝ返へします。袷先は標より三分先を縫つて、折りは表袷の方に返へして、縫代にとちつけておきます。兩身頃の袷附をしてから袷に襦をします。

4 後襦附 前襦附と同様に後襦をつけます。そして襦の縫代を身頃の縫代に縫ひ付けて其れを又表身頃に縫ひます。

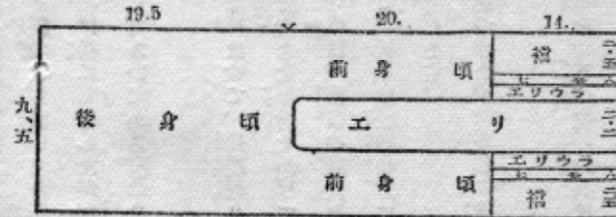
5 襦附 先に假縁をしておいた裾を、五分位の針目にして、後中、前中、襦巾を全部縫ひます。

第五十八圖  
一つ身袖無羽織裁ち方(1)



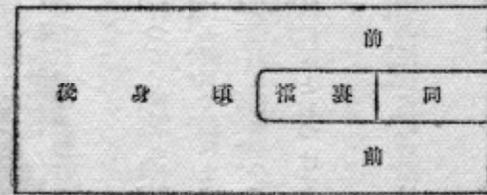
(公式) 後身丈×2+繰越×2+衿丈の半分=用布

第五十九圖  
一つ身袖無羽織裁ち方(2)



(公式) 衿丈+後身丈=用布

第六十六圖  
一つ身袖無羽織裏裁ち方



(公式) {出来上り身丈-(裁ち切り身丈-出来上り身丈)+開接代} × 2 = 羽裏用布

6 袖附 袖下に留をして袖附をします。袖の縫代は七、八分位の針目に納げつけます。  
7 仕上げ 布を覆ふて火熨斗をかけます。

小裁、中裁、羽織、被布

一つ身袖無綿入羽織

(1) 裁ち方

(1) 圖の裁ち方は、裏衿をつけないでよいですが、衿山に接ぎが出来ます。

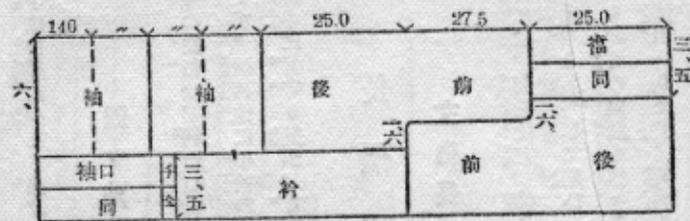
(2) 圖は衿に接ぎが出来ませんが、裏衿を用ひなければなりません。何れの裁ち方も衿肩は三分位木裁羽織のやうに、丸みをつけて裁ちます。

(2) 普通仕立上げ寸法

- 身丈 (五五釐)
- 身巾 一尺五寸
- 身 一ツばい
- 衿肩明 (四釐)
- 一寸

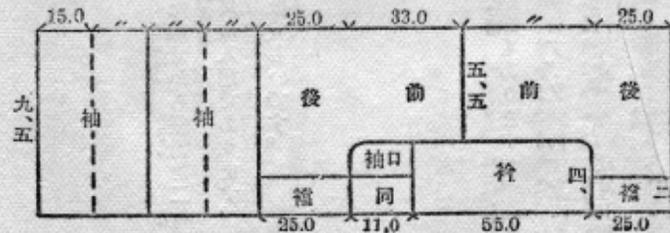


第六十四圖  
三つ身羽織裁ち方(其の二)



(公式) 裁ち方(其の一)に同じです。

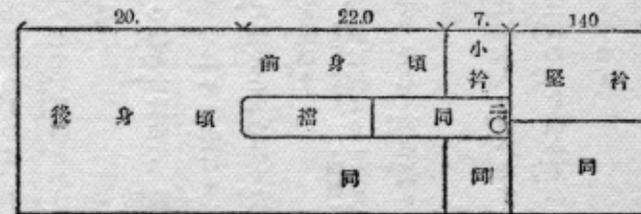
第六十五圖  
四つ身羽織裁ち方



(公式) 袖丈×4+後身丈×4+前後の差×2=総用布

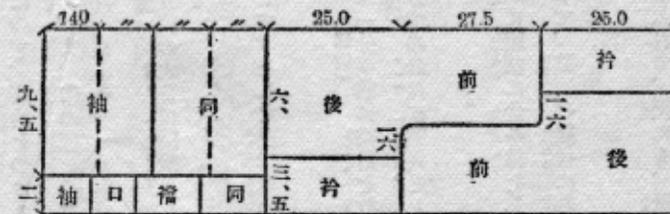
て、身頃との釣合のとれる丈の厚みにしなればなりません。衿は衿肩廻りから紐附までは衿をゆるく、其れから下は平均につけて、衿には一分の身頃には一分弱、きせを付けて、衿を締めます。次に後裾をとちて肩揚をします。肩揚は肩巾の中央を山として、脇明の三分の二位迄の間を、凡そ五分の深さに

第六十二圖  
一つ身被布裁ち方



(公式) 後身丈×2+前後の差+小衿+堅衿=総用布

第六十三圖  
三つ身羽織裁ち方(其の一)



(公式) 袖丈×4+身丈×2+前後の差=総用布

入れます。脇明は含み締とよく織ぎ合はせて置かなければなりません。後身頃に綿が置入りましたら、前身頃を出して片方づゝ綿を入れます。綿入がすみましたら、裾に假綴をして、衿附の處に紐をかけて、紐をつけます。紐は綿か真綿を中に入れて紡ければ宜しいです。衿には芯か綿を入れ

して、下は自然に少なく揚げておきます。

### 四ツ身羽織

四ツ身の彼布は、羽織の場合に衿を取つた部分から堅衿を二枚取つて、袖口は襷と同じ場所から取ります。猶其他に小衿の用布として一尺位入用であります。  
(三八種)

背の真中に背守り縫か、背紋を縫へばなほ宜しいです。

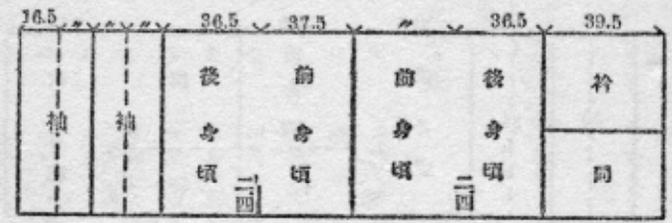
### 長襦袢

#### 女物長襦袢

長襦袢には、別衿仕立、摘み衿仕立等の種類もありますし、又袖等にも大名袖といつて裏袖にも表の布を引きかへして用ひたものもあります。又別衿仕立にも普通の衿のものと着物の衿の様にしたもの等の區別も種々ありますが、別衿仕立のものは身巾が廣くなりますから着易いですが用布が澤山いらいます。又摘み衿のものは多く關西で用ひられる仕立方であつて、衿の用布がい

### 第六十六圖

本裁女物長襦袢裁ち方(其の一)



(公式) 袖丈×4+後身丈×4+前後の差×2+衿丈=總用布

りませんから布が經濟ですが、身巾が狭くて、肥えてゐる人等には都合が悪いです。

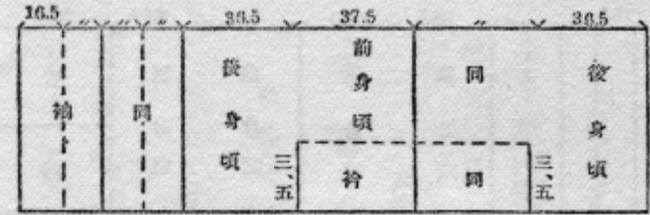
かやうに種類がいろいろありますから、従つて其裁ち方も種々ありますが其の主なるもの丈を記しました。大巾の場合は、後巾を一ばいにして衿を裁ち落しますから、衿丈は、衿肩廻り丈不足しますから、衿肩廻りにだけ別布を用ひます。

#### (1) 裁ち方

裁ち方其の一は普通の別衿仕立でありますから、衿丈は、出来上り前身丈に衿肩廻りと衿先の織代を加へたものだけ必要であります。衿肩明は、着物の衿肩明よりも一分少なく裁ち切ります。  
(四種)

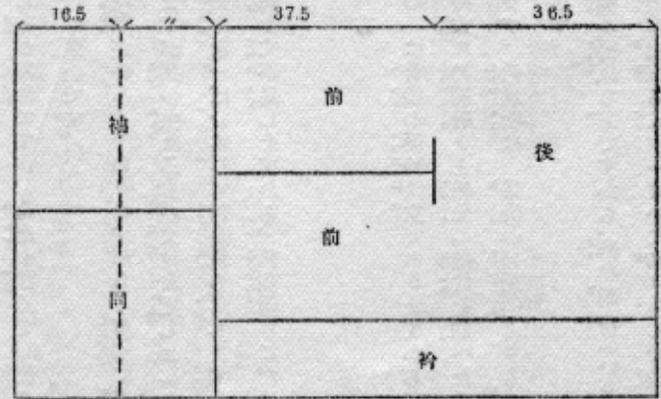
其の二は摘み衿裁ち方ですから、衿の用布はいりません。衿肩明は肩巾の出来る丈、一ばいに切り込んで後巾は背で

第六十七圖  
本裁女物長襦袢裁ち方(其の二)



(公式) 袖丈×4+後身丈×4+前後の差×2=総用布

第六十八圖  
本裁女物長襦袢裁ち方(其の三)



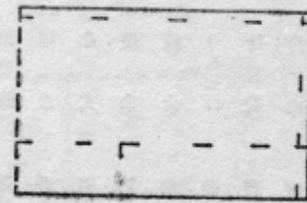
(公式) 袖丈×2+後身丈×2+前後の差×2=総用布

縫ひ込んで置きます。そしてこの場合も衿肩廻りに丈け別の布を接いで衿を拵しらへなければなりません。  
其の三は大巾物の場合ですから、肩巾の出来るだけにして、衿を裁ち落して、残りの布を一つ身裁ちとします。

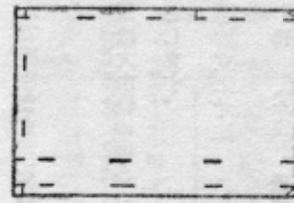
(2) 普通仕立上寸法

- 袖丈 (一覆) 着物より二分五厘つめる
- 袖口 (一覆) 潤袖
- 袖附 (一覆) 着物より二分五厘つめる
- 袖巾 (四尺) 着物より一分つめる
- 身丈 着物の着丈と同じ
- 後巾 着物と同じ
- 前巾 着物より一寸廣く (十二覆) (十五覆)
- 身八つ口 後三寸 (四覆) (前四寸)
- 衿肩明 着物より一分つめる (十一覆五毫)
- 衿巾 廣衿三寸

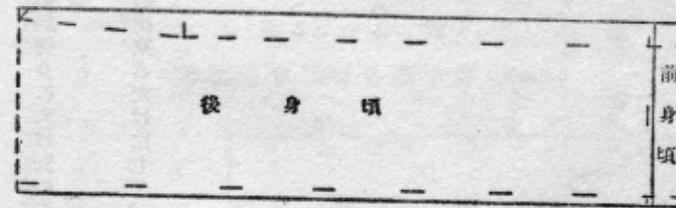
第六十九圖



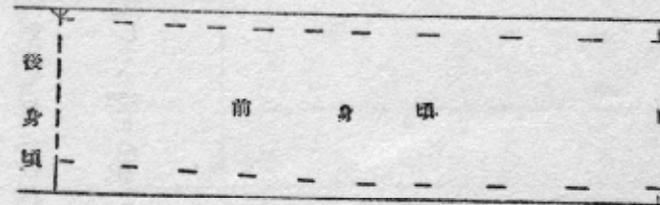
第七十圖



第七十一圖  
標附け方(身頃)



第七十二圖



20 位真直

新袷上(七廻)  
(七廻五分)  
下(一寸五分)  
前(四廻)  
着物より一分結めるか又は同寸

(3) 標 附

1 袖 表袖は袖巾を測つて残りの分を、袖口の方で裏に引き返しますから、裏袖は其引きかへしの分丈袖巾からせまくして宜しいです。袖丈は振り口で一分つめます。(四廻)  
合はせたものは表、裏同じ標附で宜しいです。

2 身頃 置き方は着物と同じく中表にして背を手前に、肩を左手に、後身頃を上にして前の長い分丈けを裾に出して置いて、背縫、後巾、身八つ口、袖附等の標をつけてから後身頃を左に取つて、身八つ口を一寸下げて標をつけて、袷附の標をします。袷附は、裾から凡そ二尺位真直に、又袷肩明から三寸位下つた所で少し丸みをもたせて袷附の標をします。(七六廻)

3 袷 袷裏の附くものは先きにつけて置いて中表に、袷附を真直に、袷附けの方は袷肩明の間を標の通りに布を斜にします。

(4) 縫ひ方順序

1 袖 表、裏の袖口を合せて折りは裏の方に返して、隠縫をします。次に振り八つを表裏合せて表をゆるめて縫つて、折りを表の方にかへして、外袖が内袖を包むやうにして袖下を四つ縫にします。袖が出来上りまして袖下を四つ縫にします。袖が出来上りましたら、袖口に凡を八分位はいつた處に、雄針、雌針の鉄をかけます。視着の場合の襦袢には紅白の糸を用ひます。袖下を縫ひます時注意しないと袖が出来ません。

若し引き返し袖の場合は振り八つを縫つて、袖下を縫へば宜しいのであります。

2 身頃 表は背、脇を縫つて折りを付け裏は裾廻しの附くものは、裾廻しを付けて、裾の方に返して、表と同様に背、脇を縫つて表、裏の裾合せをします。裾合せする時薄い布を中に入れてると宜しいです。

次に身頃の背、脇のとちをして、身八に四つ留をして、前、後の身八つ口を縫ひます。

3 袖附 袖附は女物袷と同じであります。

4 前身頃の表裏をよく合せて、縫目のきわを鉄糸で假綴ちをして、表衿に衿芯を入れて、標を合せて衿付けをします。摘み衿のものは、一分五厘を衿附の縫代として、衿肩廻りに別布を接

いだから、衿の摘みをいたします。何れの衿も三つ衿に芯を入れて、衿先を縫つて、裏にかへして衿附の縫代にとちつけます。次に衿巾を測つて鉄をかけて衿紬をします。

5 裾とち 前身に四針、後身に五針、針目を出してとちます。

6 前の強み 前身丈の長い丈は身八つ口で長くなつてゐますから、其分丈、前身八つ口の下で摘んで表に出して、門留をして置きます。前の強みは、其の必要のないものは前後同じ長さにして宜しいのです。衿をよく出す爲めに作るのですから。

7 半衿揃 衿に芯を入れて、裏衿をつけて折りは裏衿の方に返して、隠縫をかけて、本衿に紬つけます。

男物長襦袢

男物長襦袢は大體女物長襦袢と大差はありません。其の違ふ處は次のやうであります。

- 1 裏袖は多くは表を引き返して、無双とします。
- 2 裾も引き返して、毛拔合せにすることが多いのであります。
- 3 又振りは男物袷のやうに人形を作ります。

- 4 前の弛みをつけません。
- 5 衿は衿付け衿にして、半衿は着物の共衿のやうにしておきます。  
男女何れの長襦袢も後身頃背縫に、背から凡そ八寸位下つた處に一寸位の中の紐を縫ひつけますと宜しいです。

## 帯

### 子供帯

子供帯大人帯の何れの帯も仕立は簡単な様ですが、なか／＼むづかしいものでありますから、帯を仕立ますのは、やや手馴れてからでないと出来ません。

子供帯と普通に申してゐますのは巾四、五寸位の七(一五、一九釵)二六五(二六五、三〇〇釵)八尺の長さのものを申します。

布の整理

凡そ仕立物をします時は、常に布の地直しを丁寧になければなりません、殊に帯は地直しが充分でありませんと、折角苦心して仕立ましても、綺麗に出来ません。

1 耳のつれてゐる場合  
耳に烙鏝をあて、織耳を充分のばします。若し其れでも延ばしきれないときには、耳に斜に鉄を入れます。

2 織耳の伸びてゐる場合

大體の場合、耳は釣れてゐることが多いですが時には伸び過ぎてゐることもありますから、其の時は、織耳に少し霧を吹いて、烙鏝をかけますと縮みます。

3 耳の釣れや伸びのないときも、全體に火熨斗をかけて、織や折目をよく伸ばします。

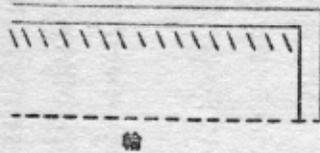
#### (1) 標付け方

布を二つに折つて、端から一寸位這入つた處を鉄糸で假とちをします。そしてチャコか笥で(メリンス類はチヨークを用ひた方が宜しいです。)巾の標を出来上り巾より五厘廣く標をつけて、軽く通し笥をします。

#### (2) 縫ひ方

帯の縫ひ目は出来るだけ細く(四釵)一分を二針か、三針に縫ひます。

第七十三圖  
標の附け方と鉄のかけ方



地厚のものは、一針ぬきに縫つた方が宜しいです。そして、丈の中央を凡そ帯巾丈残して全部縫ひましたら、丈を縫つて、巾には五厘のきせを、丈には一分位のきせをかけます。折り方は丈を先きに巾を後にします。折れましたら角を留めて芯を裁ちます。

芯の作り方  
 芯地は全體に霧を吹いて、火熨斗をかけて地直しをします。そして、一方の耳に、尺度をあてて全部裁ち落します。そして其の裁目から、出来上り帯巾より五厘狭く裁ち落して丈は直角になるやうに裁ち落します。

芯の入れ方

帯側を引き伸して、其の上に芯を載せて、一方の端を待針でとめて、芯の布と共に持ちます。他の端は帯側だけを引きますと、上に載せた芯がゆるみます。其の弛みを帯全體に平均に入れて待針を打ちます。そして木綿糸で五分位の針目で、表に針目の出ないやうにとちて真綿を両面に引きます。

角に引き糸をつけて表に引き返します。

次に縫目に熨をかけて、真中の明いてゐる所の縫ひ込みに芯をとちつけて、熨をかけて小針に

納けます。縫ひ終りましたら、疊んで、假綴をして、一晚位寝押しをかけて、火熨斗で仕上をします。

ます。

仕上げがすみましたら、矢張六つ折屏風疊みにして、菱形に飾り糸をかけます、糸は紅白の糸が宜しいです。

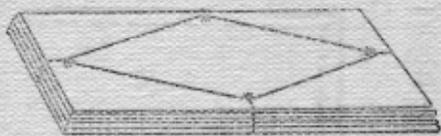
晝夜帯

一名腹合せ帯ともいひまして、兩側別々の布で作ります。

仕立上寸法

巾は七寸から八寸五分位に仕立て、丈は其帯巾によつて定めなければなりません。即ち巾が廣くなれば長さも増すのであります。そして凡その丈は九尺から一丈一尺位であります。

第七十四圖  
子供帯出来上り圖



布の整理

布の整理の方法は、子供帯と同じであります。晝夜帯は片側つゝの兩耳の長さをよく合せて置くことが必要であります。

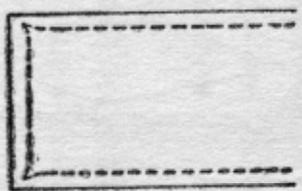
標附け方

模様様の兩端平均にあるものは、標附の上に帯巾の中心と中心を合せて、あらく鏡をかけてから、端から一寸五分位の處に、子供帯と同様に鏡をかけて帯巾を標した通し鏡をします。それから、丈の標をします。又帯の織り出しは好みにもよりますが、横筋の三本ありますときは、一本位出して置いた方が品がよいやうです。

縫ひ方

標附の時は、角は四角にして、縫ひ方のとぎ圖のやうに、角を出して縫ひます。針目は出来る丈小針にして、片方の中央を帯巾丈縫はないで、明けて置きます。次に巾に五厘、丈に一分五厘のきせをかけて、強く折り烙鏡をかけて、四角を留めます。

第七十五圖  
角の縫ひ方



芯の作り方

- 一枚芯 一枚芯は子供帯と同じであります。
- 二枚芯 二枚芯は一枚は、一枚芯と同じく出来上り帯巾よりも五厘狭く裁つて、一枚は帯巾の

縫ひ込みの巾だけ狭く裁つて、二枚を鏡糸で綴ちつけます。

子供帯と同じ要領で芯をゆるめて片側をとちつけて、眞綿を引き、一方も同様に芯をとちつけて又其上に眞綿を引きます。

四角に引き糸をつけて、片方づゝ表に返し引いて芯を落ちつかせ、周圍に鏡をかけて、引き返した處の芯をも縫込みに綴ちつけて、小針に納げます。次に六つ折屏風疊みにして押し仕上げをしてから火熨斗をかけて飾糸をつけることは、子供帯と變りません。

丸帯

丸帯は多く正装の場合に多く用ひられるものでありまして、其地質は厚地のものが多いのであります。例へば、緞織、錦、唐織、朱珍、厚板、綸子、博多、羽二重、綴子、鹽瀬、絹、朱子等が主に用ひられます。

普通仕立上げ寸法

仕立上げの巾、丈等は好や、其人の體格によつて違ひますが、普通、巾は七寸—八寸五分(三八〇廻)、(四二〇廻)、丈は一丈から、一丈一尺位の長さに仕立ます。子供物は、五寸から七寸の巾に、丈は七尺五寸か

(二七九種) 一丈一尺位にいたします。

### 布の整理

丸帯は殊に布の整理を丁寧にしなければなりません。兩耳の長さ、輪の處の長さを同じにする迄に地直しをします。又火熨斗は必ず裏からあてます。又絹綿交つてゐるものでありますと、耳の釣れを直すとき、烙熨斗では平に直りませんから其時は手で靜かに引き延します。芯も霧を吹いて烙熨斗をかけ、よく地直しをして後用ひます。

### 標附け方

充分地直しの済んだ後、二つに折つて、織り出しを揃へて、襷をかけます。垂、手の丈の縫目はよく織目を通さなければなりません。腹合せ帯のやうに襷でとちて、出来上り巾より五厘(二種)廣い巾に、通し筥をします。

### 縫ひ方

兩端一尺位は半返しに、其他は出来るだけ細かく、一針ぬきに縫ひます。そして中央より少し端によつた處を帯巾位あけて置きます。それから兩端を半返しに、よく織目を通して縫ひます。縫ひ終りましたら縫目に平烙熨斗をあて、丈けに一分五厘、巾に五厘のきせをかけて折り、烙熨斗

あてて、縫目をよく折つて芯をつけます。芯の弛み加減は腹合せ帯と同じであります。芯には兩面に眞綿を引いて、縫目にとちつけます。四隅に引き糸をつけて、少し中に返してから、引き返します。

### 薄地物の芯の入れ方

絹、紗とかのやうに、芯の地の透き通つて見えやすいものは、二枚芯にして、帯の縫ひ込みを芯と芯との間にはさんで芯をとちつけます。引き返したものを、襷で縫目をよく押へて、明けてある處を續けて、襷をして火熨斗仕上げをします。疊み方は、六つか八つの扇風だゝみにして、飾り糸をかけます。

## 男 帯

近頃男帯に女物單衣帯の中の狭いやうなもので、縫はないで二つ折りにして用ふるものもありませんが、縫ひ仕立のものを用ふることもあり、其の仕立方を記します。

男帯に用ひられる地質は、博多、縹子、朱珍、琥珀、厚板、絹、紗等で綿には綿博多、小倉、紙布等も用ひられます。

普通仕立上寸法

大人物	巾	(一〇釐)	(一一釐)
		二寸五分	三寸
		(三八〇釐)	(四一七釐)
小人物	巾	丈	一丈二尺
		(七釐)	(一〇釐)
		一寸九分	二寸五分

布の整理

女物と同じやうに、布の裏から火鼠斗をかけて地直しをします。男帯地には、織目のよく目立ち易いものが多いですから、殊に注意しなければなりません。芯も女帯と同じです。

標附け方

二つ折りにして、袢をかけて、出来上り巾より三厘程廣く標をつけます。若し縫ひ直しの物の時には、折り山を少しづらして仕立直すやうに、標をつけた方がよろしいです。

縫ひ方

巾の標を合せて、両端を三寸位縫ひ残して其の他を全部半返しに縫つて、三厘のきせをかけて強く折り烙鏝をかけて表に戻します。

芯の作り方

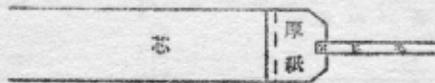
芯は、出来上り帯巾より五厘狭く裁ち切つて、其一方の端に厚紙を縫ひつけて、其れに紐をつけて、鏝をつけて、帯の中に通して芯を入れます。そして一方の端は芯と帯側とを持つて、一方は、芯を持たないで、帯側だけを持つて引きますと、芯が適當にゆるみます。そして縫ひ残した端を裏返して、帯の文標を合せて丈と角を一寸位を半返しに縫つて、帯芯をとちつけて、角をよく引き出して、縫ひ残してある處を紡けます。

他方の端も同様にします。仕上げの方法は女帯と同じであります。疊み方は六つか、八つに疊んで、半紙か壽仙紙を、五分位の中(二本)三分位の中(一本)のものとを切つて、巻きます。

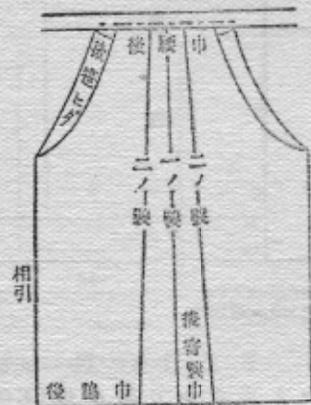
紡け仕立

紡け仕立の場合、標付の巾は出来上り巾と同じに標します。先づ標通りに縫代を折つて、芯をとちつけて、袢をかけて、両端の丈を半返しに縫つて、角を縫つてから、紡けます。紡け目は、流れないやうに出来る丈小針にします。仕上げ、其他の方法は縫仕立と同じであります。

第七十六圖

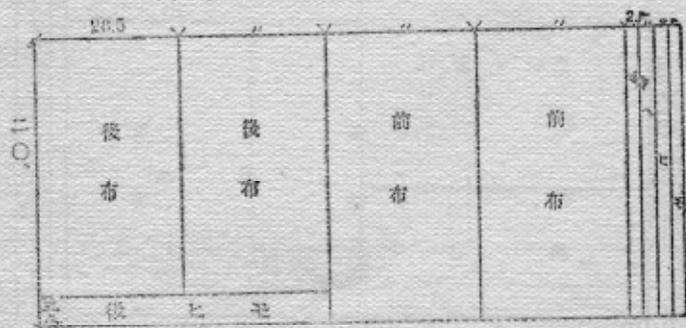


第七十八圖  
女袴各部の名稱  
後



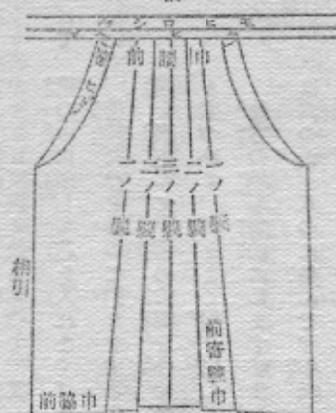
第七十九圖

大人物女袴裁ち方大巾物(其の一)



(公式) 後丈×4+前紐布×4=総用布

第七十七圖  
女袴各部の名稱  
前



総廻し

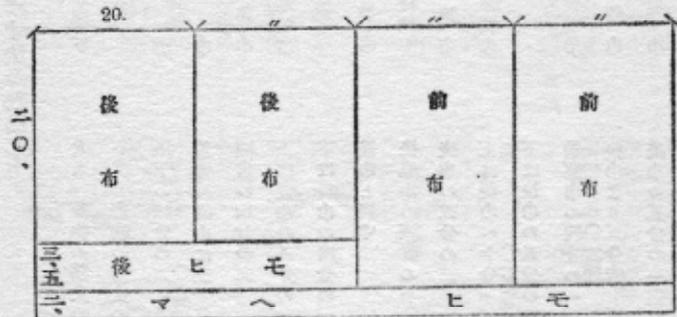
女袴各部名稱  
紐下とは、紐附から踵廻し迄の長さ  
をいひます。

女袴の材料として用ひられますものは、多くは毛織物即ち、メリンス、カンミヤ、セル等でありますが、琥珀、精好織、紬等も用ひられますし又、綾木綿等を使用することもあります。用布はたいがい大巾物ですが、カンミヤのやうなもの(五八廻)は三尺六寸位の巾もあります。

袴

女袴

第八十二圖  
中裁女袴裁ち方



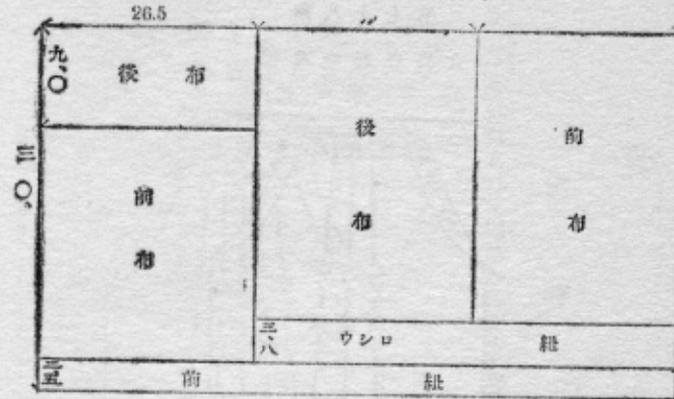
(公式) 後布丈×4=總用布

第八十三圖  
小裁女袴裁ち方



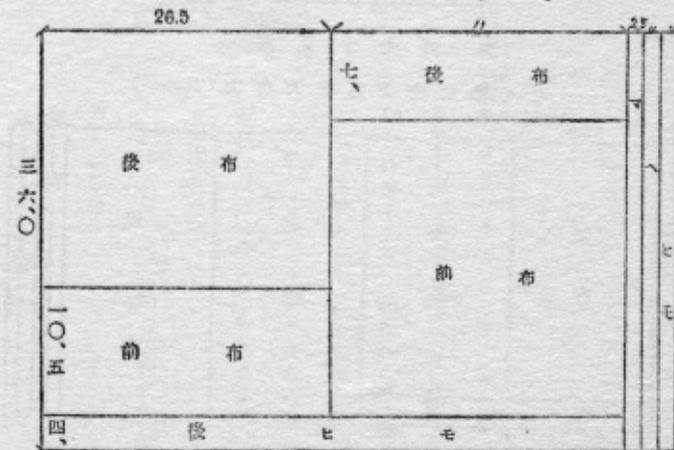
(公式) 後布丈×2+前紐巾×2=總用布

第八十圖  
大人物女袴裁ち方 三巾物 (其の二)



(公式) 後布丈×3=總用布

第八十一圖  
大人物女袴裁ち方 四巾物 (其の三)



(公式) 後布丈×2+前紐巾×3=總用布

女袴仕立上げ寸法の割出し方

紐 下	大人、着物の着丈の十分の七 小供、着物の着丈の十分の六
相 引	紐下の三分の二に八分を加へる $(\frac{2}{3}) \times 8$
後 巾	着物の後巾に五分を加へる $(\frac{1}{5}) \times 5$
後脇巾	後巾の四分の三
後寄袷巾	上は後巾の八分の一 下は後巾の四分の一
後腰巾	後巾と同寸
後管裳巾	後脇巾の四分の一
前脇巾	後巾の五分の三
前寄袷巾	上は後巾の十分の一 $(\frac{1}{10}) \times 10$ 下は後巾の五分の一より五厘を減ず
前管裳巾	前脇巾の四分の一
前腰巾	後巾より五分廣く或は同巾 $(\frac{1}{5}) \times 5$
後紐巾	後巾の五分の一弱

女袴普通仕立上げ寸法

前紐巾	後巾の八分の一	大人	十四、五寸
後紐丈	胴廻りの約二倍半	(八七割)	(七八割)
前紐丈	胴廻りの約四倍	(六二割)	(七五割)
相 引	一尺六寸五分	(六二割)	(五六割)
後 巾	(三〇割)	(三〇割)	一尺四寸八分
後脇巾	八寸	(二二割)	七寸五分
後腰巾	六寸	(三〇割)	七寸五分
後の重ぬ	八寸	(四割)	(二八割)
後管裳巾	一寸	(六割)	七寸五分
前脇巾	一寸五分	(一八割)	一寸三分
後寄袷巾	四寸八分	(四割)	(七割)
	上 一寸	(二・五割)	四寸五分
	下 一寸	(八割)	九分
		(七割)	一寸九分

後脇巾 後脇巾 後の重ね 後脇巾 前脇巾 後寄腰巾 前腰巾 前脇巾 前の重ね 後紐巾 後紐丈

(二一廻) 五寸五分  
(二八廻) 七寸四分  
(三廻) 八分  
(五廻) 一寸三分  
(一七廻) 四寸五分  
(三廻) 八分  
(六廻) 一寸六分  
(二八廻) 七寸四分  
(四廻) 一寸  
(三廻) 八分  
(五廻) 一寸三分  
(一七廻) 四寸五分

(一七廻) 四寸五分  
(二五廻) 六寸五分  
(三廻) 八分  
(四廻) 一寸  
(一四廻) 三寸七分  
(三廻) 八分  
(六廻) 一寸六分  
(二五廻) 五分  
(四五廻) 一寸一分  
(二六五廻) 七寸  
(三五廻) 九分  
(三廻) 八分  
(四五廻) 一寸一分  
(一五〇廻) 三尺九寸五分

前寄腰巾 前腰巾 前脇巾 前の重ね 後紐丈 前紐巾 前紐丈 紐下 相引巾 後巾

上 (三廻) 八分  
下 (五八廻) 一寸五分  
(三二廻) 八寸五分  
(四五廻) 一寸二分  
(四廻) 一寸  
(五九廻) 一寸四分  
(一九〇廻) 五尺  
(三五廻) 九分  
(三米) 七尺九寸

(三廻) 八分  
(五八廻) 一寸五分  
(三〇廻) 八寸  
(四廻) 一寸  
(三廻) 八分  
(五九廻) 一寸四分  
(一八〇廻) 四尺八寸  
(三五廻) 九分  
(三米) 七尺九寸

前紐巾 (三) 八分  
 前紐丈 (二) 八五寸  
 七尺五寸  
 五、六寸  
 (五) 三寸  
 一尺四寸  
 (四) 〇寸  
 一尺五分  
 (二) 一尺  
 五寸五分  
 (一) 六寸  
 四寸二分  
 (二) 三寸  
 六寸  
 (三) 八分  
 八分  
 (四) 一寸  
 一寸  
 (一) 三寸二分  
 三寸二分  
 (二) 六分  
 上 六分  
 前寄裏巾 (二) 三寸  
 上 一寸二分  
 (一) 五寸  
 六寸六分

(三) 八分  
 (二) 六五寸  
 六尺

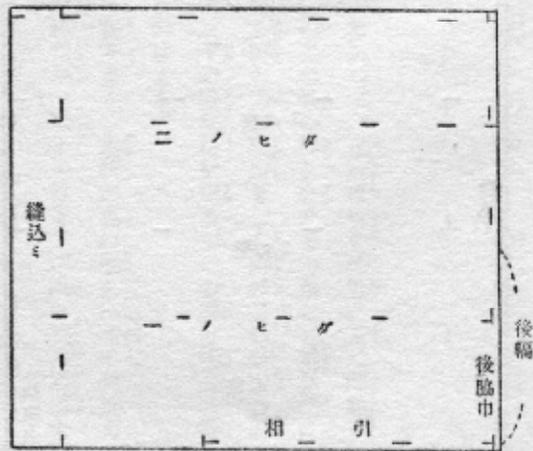
(五) 一寸三分  
 下 一寸三分  
 (四) 一寸二分  
 下 一寸二分

前管裏巾 (三) 九分  
 前の重ね (二) 五寸  
 六分  
 後紐巾 (四) 一寸二分  
 後紐丈 (一) 三〇寸  
 三尺四寸五分  
 (三) 八分  
 前紐巾 (三) 八分  
 前紐丈 (二) 三〇寸  
 六尺一寸

(3) 標附け方

1 後布 中表に二つ折りにして、裾口を右に相引を手前に置いて先づ、裾の紬代を五分の標をつけ、次に丈標、相引の丈と縫代、後脇巾を標してから、後巾を相引の標から計つて假に標を附けて、残りの布巾を二等

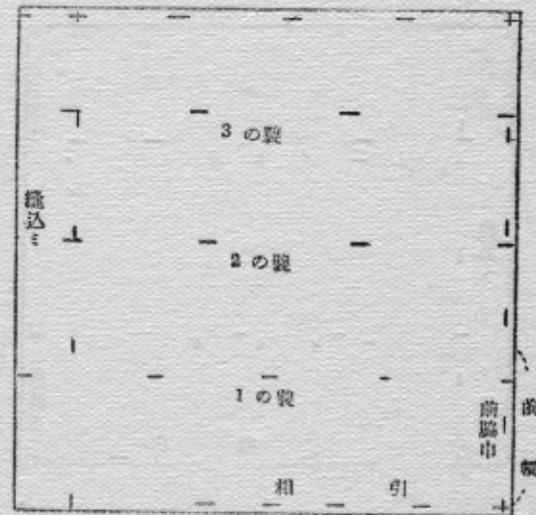
第八十四圖  
後布標附け方



分した處を二の襷の標としま  
す。次に上一枚を取り除いて、  
後巾の十分の一を中央によせ  
て、重ね襷の標をつけます。

2 前巾 後布と同様に置い  
て、裾代、丈、相引及び相引  
の縫代をつけて、前脇巾を標し  
て一の襷とします。次に相引の  
縫代から前幅を計つて残りの布  
巾を三分分した折り山を三の襷  
とします。そして二と三の襷の  
中間を二の襷とします。

第八十五圖  
前布標附け方



りをつけて、折り伏せ縫にします。

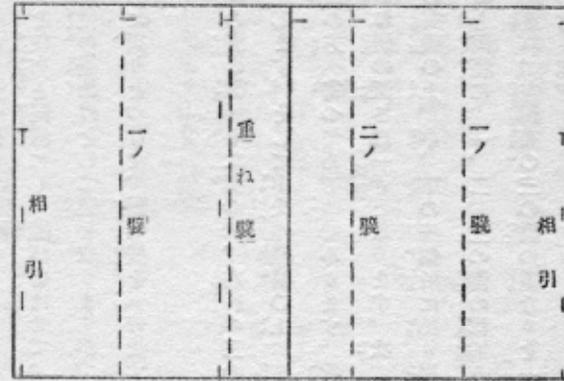
次に前布を後布と同様にして縫ひ合はせて、脊縫と同じに折りをつけて、折り伏せ縫にします。  
次に前、後の裾付けをして襷を取りますが、裾廻しの布をつけます場合には、裾廻しをつけて  
裾廻しの方に折りをつけて、隠し線をかけます。

襷の取り方

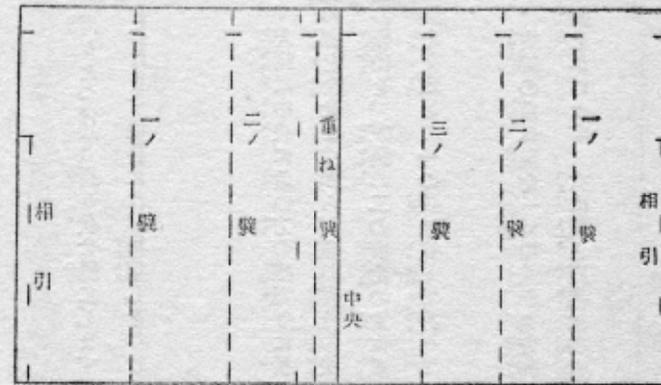
後襷 一の襷の標通りに折つて、右脚の二の襷を折つて、左脚は中央に近い方の標通りに折つ  
て重ね襷とします。そして中央の縫目の上に左脚の二の襷の標を合せますから、重ね襷は中央か  
ら、一寸右の方へ寄つてゐるのであります。次に右脚の二の襷山を、左脚の二の襷山の上に重ね  
ますと、重ね襷の深さは一寸となります。次に上、下の寄襷巾を定めて一の襷を線糸で押へて、  
更に全體の寄襷の上、中、下の三個所に飾り線をかけます。

前襷、後と同様に、一、二、三の襷の標通りに折ります。右脚の重ね襷を一寸中央から左脚の  
方へ出して重ね、左脚布の三の襷の重なりを一寸に重ねて線をかけます。次に後と同様に寄襷巾  
を定めて、飾り線をかけます。

第八十六圖  
襷取り方(後布)

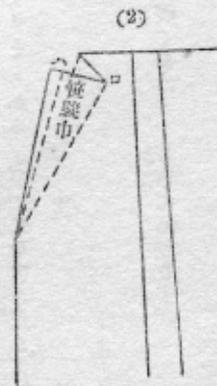
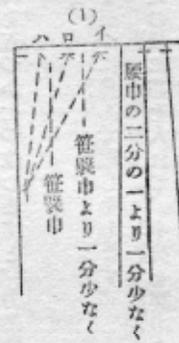


第八十七圖  
襷取り方(前布)



襷取り方

第八十八圖  
襷取りの標附



標の附け方

先づ中央から腰巾の二分の一より一分少くイの標をつけ、次にイから襷取りより一分少くロを標し、次にロから襷取り丈を取つてハとします。次に(2)圖のやうにロの標から、相引の處に丸みをつけて折つて、又ハの標からも折ります。そして襷をかけて、よく折りのつく様に壓をしておきます。但し襷は標通りに許り出来なくとも、よく恰好をみて作らなければなりません。前後とも方法は變りません。

襷の縫ひ方

(2)圖のやうに折つたものを、内側からロの折り山から一分奥にはいつた所を、五分位の針目で

表に小針を出して縫ひます。但し相引から三分位の間は縫はないでおきます。次にハから又折つて笹髯の内側を相引の際迄細かに紡けます。

相引、門留、及壓

相引を縫ひ合せて、折りを前布の方に折つて隠簾をかけて、裾を紡け足し相引の際に門留をします。

門留の仕方

相引の留の際の裏から針を出して、前後の笹髯の端を抄つて、力糸二本糸をかけます。そして表に出た力糸を抄つて、針の先に糸をかけて裾口の方に向つて糸をひきますと、力糸に糸がかかります。これを五つか七つ位しますと、力糸位の巾になりますから、裏に糸を引き出して結びます。

壓、丈を三つに疊んで壓しをします。

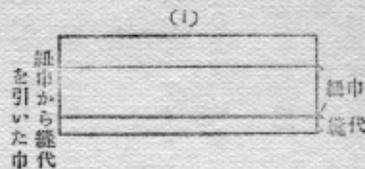
紐、前後の紐に芯を入れて、中央を腰巾より二寸位廣くあけて、町穿に紡けます。

紐附

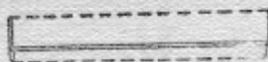
前紐附、前紐のあけてある處に、紐巾の二倍に美濃紙を切つて、芯の内側にとちつけてから、

紐の中心と、前腰の中心とを合せて待針を打つて、半返へしに紐をつけます。但し兩脇は三の號から三分づゝ上に上げてつけます。

第八十九圖  
後紐厚紙の切り方



第九十圖  
圓を寬から折つけたもの



第九十一圖  
兩角を五分落す



後紐附、先づ圖のやうに厚紙を切ります。厚紙の丈は腰巾より一寸長く、巾は紐巾の二倍に裁つたものを(1)のやうに、縫代と紐巾とに標を附けて、其處に通しべらをつけて、(2)のやうに折ります。そして兩角を五分の丸みに切りますと、(3)のやうになります。

次に裁ち切つた厚紙を後紐の中に、真中を合せて厚紙の折り山から一分はいつた處と、紐の  
 紵け山から一分入つた處とを合せて、後腰に皺のよらないやうに、待針を打つ  
 て、半返へしに後紐をつけて、後腰の紐代は厚紙の中へ全部入れて（若し餘り多い時には、出  
 ても宜しいです）紵けます。飾り糸を通す場合には、紐附の前に太白の左捻と、右捻を二本合  
 せて、紐附の山から三分這入つたところに、雌針、雄針で飾り紐を通してから紐附をします。  
 仕上げ

霧を吹いて、アイロンをかけて仕上げをします。襷は前後の飾り襷だけ残して、其他は全部取  
 つてしまひます。丈を三つに折つて、紐をたゝみます。

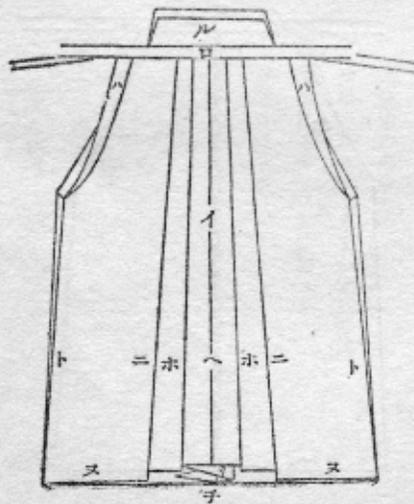
男袴

男袴には襷を附けたものと、襷のないもの即ち行燈袴とあります。大體男袴は、襷をつけるの  
 が本體であります。近頃は大中物のセルの様なもので仕立てますので、其のやうな地質を用ひ  
 ます時には、行燈仕立てに致します。行燈仕立ては、襷の取り方は女袴のやうにして、後腰をつ  
 ければ宜しいのであります。

男袴仕立上げ寸法の割り出し方

- 紐 下 着丈の十分の六に一寸を加へる (四割)
- 相 引 紐下の三分の二に五分を加へる (二割)
- 後 巾 着物の後巾と同じ (二割)
- 後腰巾 後巾の四分の三に五分を加へる

第九十二圖  
男袴各部の名稱



- ル 裏
- ヌ 前
- リ 切
- チ 廻
- ト 引
- ヘ 三
- ホ 二
- ニ 一
- ハ 管
- ロ 前
- イ 紐



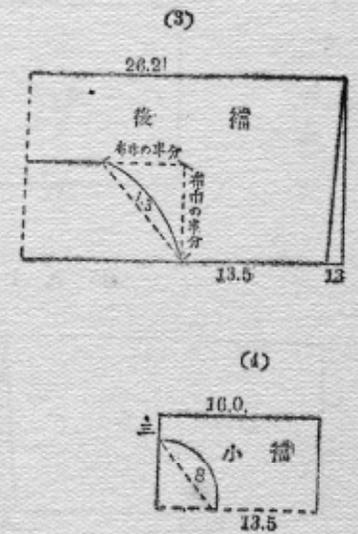


鉄の入れ方

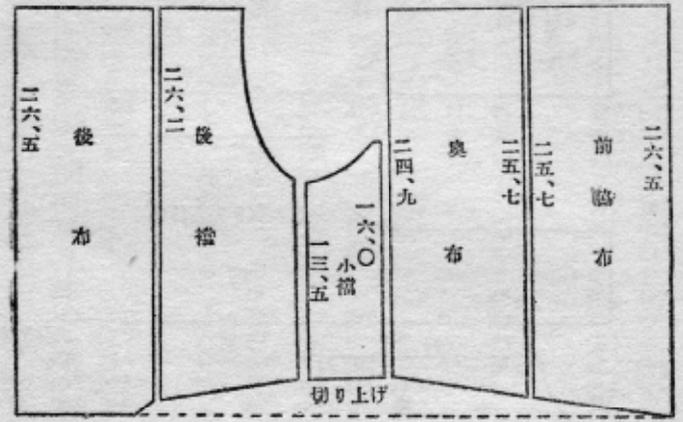
後文を定めて積り方が終りましたら、圖のやうに布を裾口を右にして、後布から順次疊みまして、左の輪を裁ち切りますと、後布、後襟、前襟布、奥布、腰布、小紐布、小襟となります。但し小襟、腰布、紐布の時は二枚づゝ、續けて置きます。

次に右の布を次のやうに裁ちます。  
 後布、裾を右にして、後布巾八寸五分を計つて、三分の切り上げをつけます。  
 奥布、前襟布、奥布、前襟布の續いたものをひろげて、奥布の方へ八分の切り上げをつけます  
 と、前襟布の長い方の丈が、二尺六寸五分となつて、後布の丈と同じくなります。  
 後襟、矢張り裾を右にして、手前に一寸三分の切り上げをつけて、襟の高さ一尺三寸五分を標して、左の輪を布巾の半分から圖のやうに後襟の判りを裁ち落します。

第九十八圖

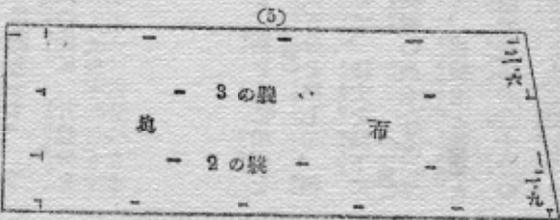
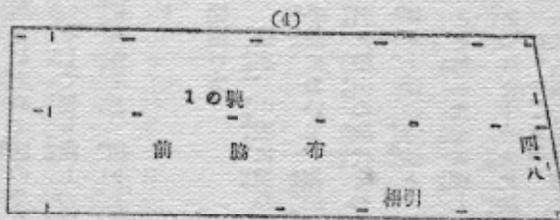
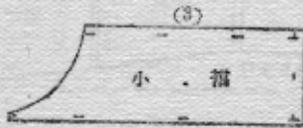
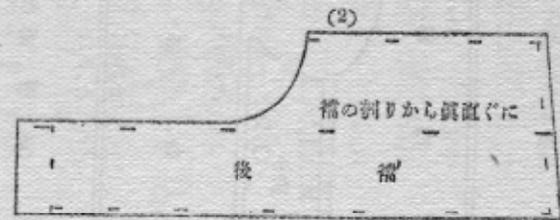


第九十九圖  
切り離した圖



小襟、輪を下に裾口を右にして、襟の高さを定めて圖のやうに裁ちます。  
 そして切り離しの圖の様に、片脇分を並べますと、切り上げが一寸六分つきま  
 す。  
 標付け方  
 後布、中表に重ねて、裾を右に相引を  
 手前において、裾約代五分を標して、相  
 引と相引の縫代をつけて、後文を紐下に  
 切り上げの寸法と、紐附の高くなる三分  
 とを加へた丈に標して、後襟附と後布と  
 をつけます。次に紐附で後巾の二十分の  
 一即ち四分を投げの方によせて標をつけ  
 て、其標から裾口の後巾の標とに斜に標

第百圖  
方 附 標



をつけます。但し左脚には、後巾の十分の一即ち八分を後腰線より後襟の方に計つて標します。  
次に後腰の標から腰巾の二分の一を投の方に計つて、相引とに斜線を引いて、投げを二つに折つて標をかけます。

後襟 後布と同じにおいて、裾縮と紐附の標をして、四分に乘間の縫代を標して、其の標通り縮目を通して標をつけます。

小襟 中表に二枚重ねて、裾縮と縫代とをつけます。

前脇布 中表に二枚重ねて、相引を手前に裾口を右において、裾縮代、相引の標をつけて、相引の縫代から、前脇腰巾の標と奥巾の標をつけます。

奥布 裾縮代、紐附の標をして、前脇布の縫代から、一寸九分離して二の裏の標をつけて、乗間の縫代を四分に標して、其の標から二寸六分離して三の裏の標をつけます。

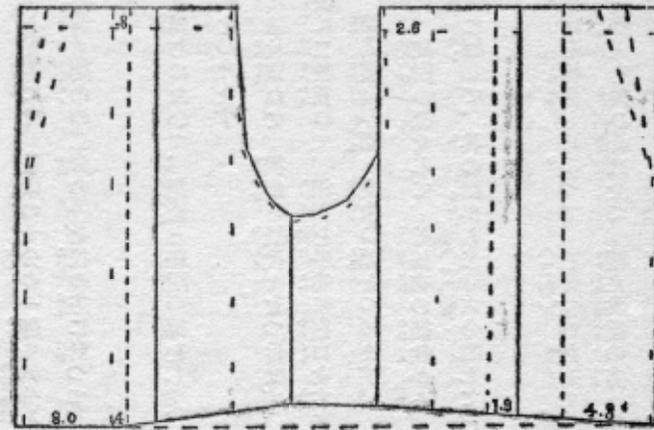
縫ひ方順序

- 1 左右の投げを標通りに折つて、五分位の針目で、投げを延ばさないやうに拵けます。
- 2 後襟と後布とを縫ひ合はせて、兩足共裾の方へ折ります。
- 3 前布と奥布とを合せて、奥布の方へ折ります。

第 百 一 圖

縫ひ合せ方と襷の取り方の圖

左 脚 布



4 奥布と小襠とを縫ひ合はせて、小襠の方へ折つて隠装をかけます。

5 後襠と小襠とを縫ひ合はせて、小襠の方に折つて、其處にも隠装をかけます。

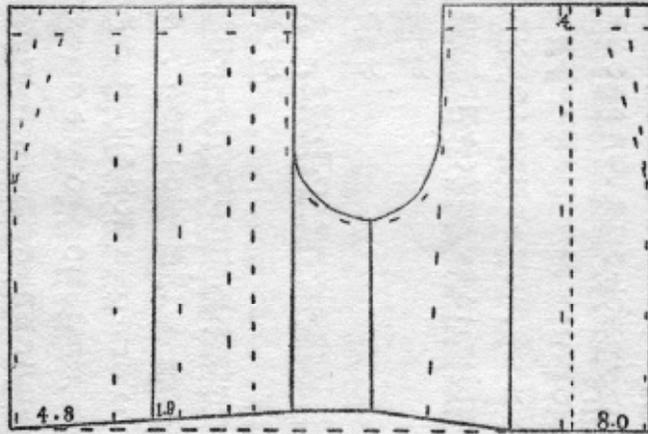
6 乗間を袋縫ひにします。絹布や毛織物の時には、乗間を眞綿か布で包みます。

7 前後の相引を縫ひ合はせて、前布の方へ折りをつけます。

8 兩脚とも裾つけをします。後布の後襷の標の處では、襷を一つ取つてつけます。

第 百 二 圖

右 脚 布



襷の取り方

1 後襷 乗間の處で後襷の継代を眞直に折つて、後の中心を定めま

す。

次に裾を右に後布を持つて、襠を右に折り返へして、中央の襷の處を折つて、乗間の折りを右脚に返へします。次に左脚の重ね襷を標通りに折つて、中央と後布の腰巾の二分の一の標と合はせて、右脚は後襷の標通りに折つて、左脚の後襷標の上に重ねますと、重ね襷は上は八分、下は一寸の深さになります。そして鉄をかけます。

2 前襲 後布を下にして、前布を上に出して各々の襲に折り山を付けます。但し右脚は三の襲の折り山を折りません。先づ乗間の前の縫目を、後の乗間の前の縫目を、後の乗間の縫目に重ねて、中心を定め、右脚三の襲の標を中心として（この時候襲の折り山が定ります）右脚三の襲をこれに合はせて、この襲一の襲を順次、寄せ襲の寸法を計つて鉄をかけます。

3 前後の襲に上下共二寸程はなれた處に飾襲をいたします。

4 笹襲の取り方

笹襲の作り方は、女袴と同じであります。

5 腰板の作り方

(1) 腰板紙の裁ち方

美濃紙二十枚張程の厚みの板目紙を使つて、次の様に裁ちます。先づ腰板の中と高さで長方形を作り、腰巾の六分の一を兩端から計つて、其の六分の一の處から下の腰板巾の處へ、其れれ斜線を引いて、其通りに裁ち落します。そして其の斜線の長さが、左右全く同じくなるやうに致します。若し絹布の場合には、腰板の上の兩角を五分位の丸みで缺き落します。其れから半紙を（四割）八分の巾に裁つて、出来る丈捻の堅いこよりを、腰巾の凡そ二分の一の長さを作りま

(2) 附菱の裁ち方

腰巾の二分の一を附菱の中として、腰板の高さに二分五厘加へたものを、丈として裁ち切ります。

(3) 裏打ちの仕方

半紙をもんで焙燥で伸して、裏腰巾と附菱布との周圍に、淺く糊を引いて裏打ちをします。

(4) 表腰の貼り方

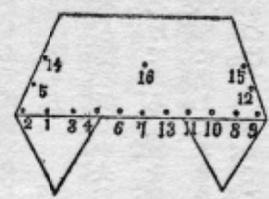
表腰布と腰板紙の中央の裏に、それれ標をつけて、腰板紙の表側の下の方に、二分五厘の巾に糊をつけてから、糊を軽くふき取つて、表腰布を五分程裏に折り返へして出来るやうに、兩脇の布を平等に出しておきます。この際、こよりに糊をつけて、腰板の下の方にはづれない程度の處にはりつけて、指先でこよりの廻りを押へて落ちつかせ、裏に返す布の兩脇の布を下方から計つて、紐巾よりも五厘狭く、腰板の際まで切り込みます。そして腰板の上部と、兩脇を裏の方へ折り返へして貼りつけます。

5 附菱

附菱の中は、腰板巾の二分の一に、丈は腰板の高さに三分加へたものにして裁ち切ります。そ

して附菱も、美濃紙のもんだものを貼りつけてから、作ります。先づ高さは、腰板の斜の長さの二分の一に一分加へたものとし、巾は腰巾の三分の一に、二分加へます。其の寸法によつて、附菱巾の縦の一方を、三分裏に折り返へして、腰板脇の表にあて、附菱巾を標通りに折つて、附菱の形を整へて、裏から烙鏝をあて、から、表腰板の脇と毛抜き合せにして、附菱の寸法の狂

第百三圖



板の裏にも針を出して、しつかりと留めます。

8 裏腰布の付け方

裏腰布にも美濃紙を貼つて、腰立の裏に腰立標に合はせて、鏝で押へておきます。

9 腰立て方

はぬ様に腰板の裏に貼りつけます。

6 紐縫 後紐二本を、一方の端を三寸程残しておきます。

7 後紐附と留め方 折け残した端から、五分這入つた處の紐の裏から、二本の捻り糸を出して、腰板脇の紐巾の處を抄つて、又紐の裏に針を出して糸を結びます。そして其の糸を紐の表に出して、紐の端を三角に折つて、紐巾をキの字の形に、腰

表腰布の下の角の縫ひ込みを、紐の中に入れて筋残りを折ります。次に表腰板の表を出して、後布の腰立の處へ眞直にあて、左右の掛けを少し張り目にして、附菱を起して、待針を打つて、裏返へして、裏腰布をみて、二本の捻り糸で、数字の順序に腰立を致します。其時、(5)と(12)との針は、腰板と附菱の上の角とに通し、(14)と(15)との針は腰板に通して、表裏の腰布と、紐の上とを少し抄つて共に糸をかけます。又(16)の針は一度表に出して、同じ穴に針を出して、裏は少しはなしでぬき出しますから、表には針目が出ないやうになります。そして(14)(15)に渡つた糸にかけて、打ち留をします。腰立が残りましたら、裏腰布を表腰布よりも五厘つめて折つて、三方を糊で貼りつけます。

(10) 前紐附 前腰附に接ぎ目の出ないやうに、芯を入れて約けた紐を、前腰にあて、女袴と同じやうに紐附をいたします。

(11) 仕上げ 木綿物は霧を吹いて、軽くアイロンをかけて仕上げをし、絹布類は、布を覆ふてアイロンをかけます。但し毛織物は、霧を吹いた方がよいです。アイロンかけの済んだものは、三つ折に疊んで、前紐の紐を適宜に折り疊んで、五分位の中に紙を切つて、紐を三ヶ所巻いておきます。

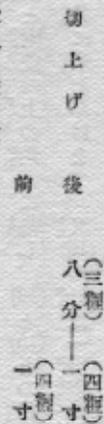
男物 袴無袴

袴無袴は、女袴のやうに裾がありませんから、裾附のものよりも、裾の布だけ少くとも宜しいのであります。そして其の用布は多くは大巾物を用ひますから、其の裁ち方を一、二記します。

袴無袴(1)の裁ち方は、紐を前布から取らないから、前の縫の重なりが多くなりますが、前紐に接ぎが多くなります。

(2)の裁ち方は、前紐の接ぎが出来ませんが、前布の中が(1)の裁ち方よりも狭くなります。

2 普通仕立上げ寸法



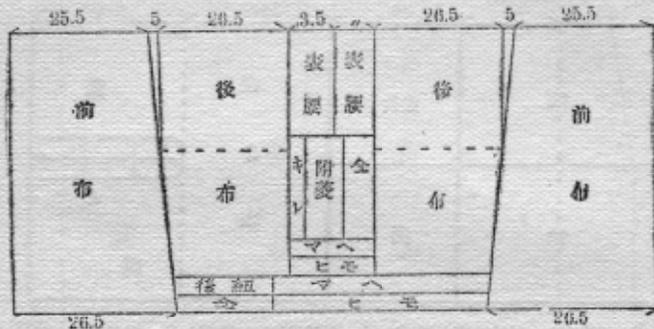
其他は裾附の男袴と同じであります。

3 裾の附け方

二枚の後布を接ぎ合せて、中表に裾を右に相引を手前にして、二つ折りにしておきます。次に

第百四圖

男物 袴無袴の裁ち方(1)



(公式) 前布丈×2+後布丈×2+腰布×2+裁ち廻り=総用布

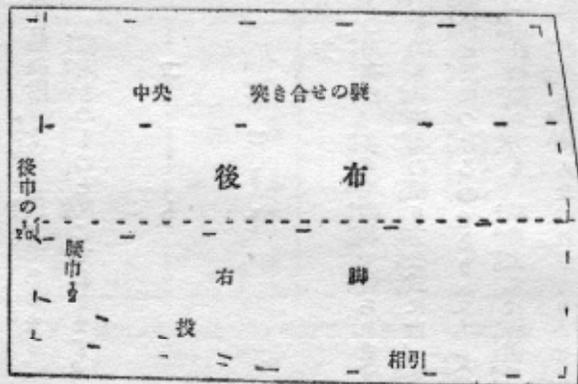
第百五圖

男物 袴無袴の裁ち方(2)

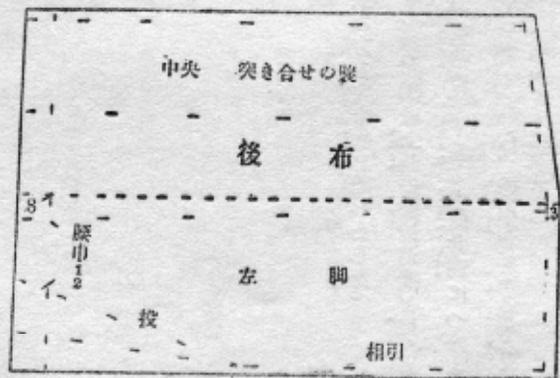


(公式) 後布丈×4+腰布=総用布

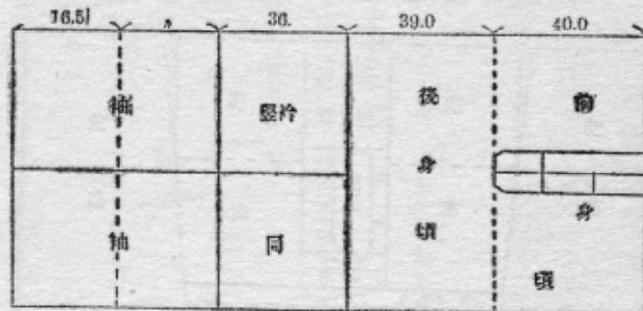
第百七圖  
襦無袴標附け方(1)



第百七圖  
(2)



第百六圖  
長コートの裁ち方(2)



(公式) 袖丈×2+身丈×2-腰袴下り+繰越×2=總用布

襦の締代を五分にして、相引の投げの標をしませ。次に後巾を定めて、後巾の二十分の一手前に標して、其標と後巾の標とで後襷の標をつけて、中央の締代と後襷との中間に突き合せの襷をつけて、左脚布には重なり襷の寸法を、後巾の十分の一に標をつけますから、襦無袴の後襷は後襷の下に、更に重なりが出来るのであります。前の標附は女袴と同じであります。

4 縫ひ方順序

(1) 後布 投げを折つて拵けて、中の襷即ち突き合せの襷標を、左右から突き合せて、重なり襷の上に、右脚をのせて襷をかけて、背縫と反対に折ります。

(2) 前布 女袴と同じであります。

第 百 八 圖  
長 コ ー ト の 裁 ち 方 (1)



(公式) 袖丈×2+身丈×2-堅衿下+繰越×2=総用布

2 普通仕立上げ寸法

袖丈	着物より二分長く	(八割)
袖口	着物と同じ	(四割)
袖巾	着物より一分長く	(二割)
袖附	着物より五分多く	(四割)
身丈	着物より一分短かく	(二割)
後身巾	身八ツ口の處で着物と同じ	(二割)
身八ツ口	裾口は五分廣くする	(二割)
堅衿巾	着物より五分少く	(一四割)
堅衿下り	上 三寸八分 下 四寸	(一五割)
小衿巾	着物と同じ	(二割)
ポケット下り	五分	(一三・五割)
ポケット口明	三寸五分	(一五割)
裾	四寸	(四割)
裾キ	着物より一分長く	(四割)

1 裁ち方

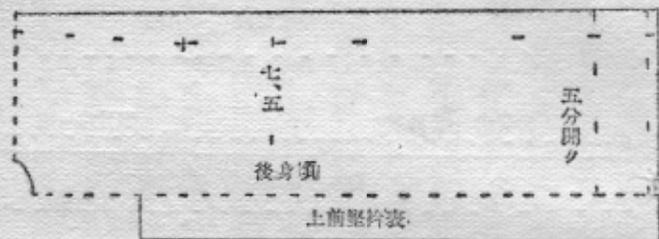
長コートの用布は、多く毛織物で作られますから、其の裁ち方も大巾物を記しました。  
裁ち方(1)も(2)も其用布の積り方公式には、變りありませんが、(1)は上前の堅衿が襷目なしで、下前堅衿を別につけるのであります。又(2)の裁ち方は、堅衿は、上前、上前共別につけます。そして何れの裁ち方も、前身丈には繰越分を一寸丈長くしますから、総用布を積る場合には、其繰越しの分を見積らなければなりません。

長コート

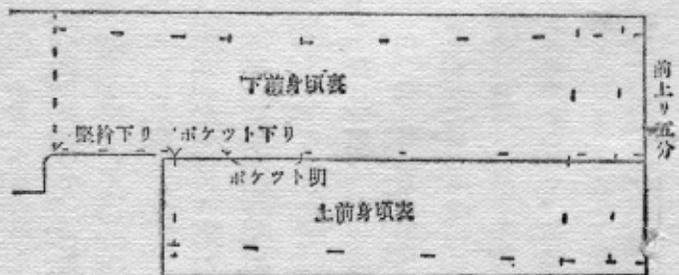
コート

- (3) 相引と裾衿 相引を縫つて、前布に折り返へして、裾衿の残りを納めます。
- (4) 筐装と前紐附 女袴と同じであります。
- (5) 腰立 裾附きのものと同じであります。

第百九圖  
標附け方(1)



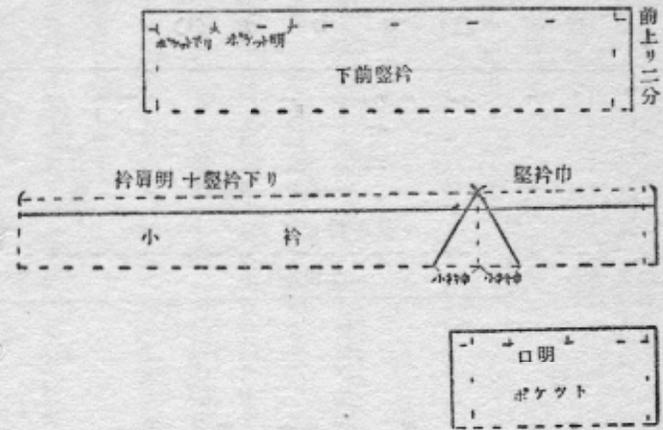
第百九圖  
(2)



2 標 附

身八ツ口	着物より五分少なく	(二割)
堅衿巾	上 三寸八分	(一四割)
堅衿下リ	着物と同じ	
小衿巾	五分	(二割)
袴	着物より一分長く	(四割)
	下 四寸	(一五割)

(1) 袖 女物單衣と同じです。但し袖口布は別に標を附けます。  
 (2) 身頃 置き方は着物と同じにしますと、上前堅衿が手前になります。身巾は身八ツ口の處で着物の後巾と同じにして、裾口で五分開きます。次に(2)のやうに後身頃を左手に除いて、堅衿下リ、ポケット下リ、ポケット明、堅衿附の標をして、堅衿の上、下の巾を定めて標をして、脇縫の處で裾の縫代を計つて、其れに五分を加へたものを堅衿の下の巾の處の縫代として、其標から裾の折り代を標します。  
 (3) 堅衿 下前堅衿を、輪を下に裾を右にして、堅衿巾の上、下の標をして、堅衿附を標して、堅衿丈、ポケット下リ、ポケット明をつけてから、堅衿の下に前下リ二分をつけます。



(4) 小衿 小衿の出来上り巾の四倍を先づ縫代を折つて、更に出来上り堅衿巾に折りつけたものを圖のやうにおきます。そして丈を二つ折つて、縫代の方に衿肩明と堅衿下リ、堅衿巾の丈を標します。そして堅衿巾の處で輪の方に、小衿巾を上、下につけます。

3 縫ひ方順序  
(1) 袖 袖は單衣羽織のやうに、袖口布をかけて縫ひます。

(2) 身頃 脇縫を半返へしにして、縫目に烙銀をかけて、縫込みを折つて、假襷をかけてまつるか、千鳥掛にします。そして上前堅衿裏をつけて毛抜き合せに

して、堅衿の下の中のを二分堅衿附で控へて、襟形を作つて、堅衿裏に假襷をかけて、衿の折り代にも襷をかけてまつります。

(3) 堅衿附 下前堅衿に、ポケット布を合せて、ポケットの口明を縫つて、ポケットの上、下を堅衿巾に合せて縫ひます。そして堅衿附を縫つて、縫目を割つてから、堅衿裏を堅衿附の縫目から一分控へて、裏堅衿巾を折つて、襷をかけてまつりつけます。但し上下共堅衿附の上は、三分程は縫はないでおきます。

(4) 小衿 小衿の角を、小針に半返へしにして、烙銀をかけて角を作ります。そして堅衿の下りの角に、小衿の角を合せて、堅衿の裏から小衿の角に針を出して、堅衿下りの角を、糸を一本抄つて、出した針目から三厘程離して糸を結びます。次に小衿を衿肩明の間は強めないやうに、やゝつらし加減に待針を打つて、堅衿巾も同時に半返へし縫に致します。そして縫目に烙銀をかけて、小衿の裏を輪のまゝ細かに結びつけます。

(5) 吊り紐附 肩當の布を斜布五分位の中に切つて、四つ疊みにして、折り山を穴かぶりやうに、折り目をまつりて、烙銀で月形にします。そして其れを、脊の裏に小衿の間に入れて、特によく留めます。

(6) 肩當附 肩當の脊縫をして割ります。端は三つ折り筋けにして、身頃の脊に合せて、肩當の端を三寸位表身頃に、針目の出ないやうに千鳥掛けをして留めます。衿肩廻り、堅衿下りに肩當布をまつりつけます。

(7) 袖附 肩當を除いて、單衣と同じやうに半返へしに袖附をして割ります。そして其縫目に肩當布をまつりつけます。但し身八つ口は袷のやうに、肩當布と表身頃とを縫ひます。

(8) ホック・紐附 堅衿の上に二つと上前堅衿丈の二分の一の處に一つ、ホックを附けます。紐は下前堅衿丈の二分の一の處に一本、上前脇縫の處に、堅衿丈の紐より一寸上つた處とに紐をつけます。紐は丈を五寸、巾を三分位にいたします。

(9) 仕上げ 全體に霧を吹いて、強いアイロンをかけます。墨み方は、長襦袢のやうに、四つ身疊みにして、脇縫から後身頃に折つて、脊縫で兩方の脇縫を合はせて、丈を四つに折つて、小衿附の上に出るやうにします。

### 小袖及び重ねについて

小袖と俗に云ひますものは、表裏共絹布の長着でありますが、元來は表裏絹布の綿入のことであります。近頃は綿入に限られません。絹布の事を總て小袖と申します。

而して小袖にも色々の種類があります。即ち、

1 裾廻し附のもの これは普通に用ひますもので、裾廻しは、無地、模様物等、其表に調和のよい色合、柄のものを用ひます。

2 無垢仕立のもの 無垢仕立とは、表と同じ布を裾廻しに引き返へしたものであります。無垢の場合は、紋をつけることが多いのであります。そして裾には喪服の外は模様をつける事が普通になつております。模様にも色々ありますが、尤も多く用ひられますものは江戸襦袢模様(衿下から前巾にかけて模様のあるもの)又は裾模様(衿から前巾、後巾に次第に低く模様をつけたもので、振袖とすることもあります。)或は襦袢模様(衿に丈模様のあるもの)或は片襦袢模様(下前の裏に丈模様のあるもの)襦袢模様(衿に許り模様のあるもの)等色々種類があります。又男子の宮参り着に用ひられます鬘斗目模様と云つて、袖と腰に模様をつけたものもあります。

凡て男、女の模様物には、三ヶ所(背、袖)又は五ヶ所(背、袖、前巾)に紋をつけられます。そして其紋の位置は、男、女又は子供物に依つて、其寸法が違ひます。即ち、

1 紋の位置

背紋下り(背裁ち切りより)	袖紋下り(袖山より)	抱紋下り(肩山より)
本男 (六・五厘) 一寸七分	(七・五厘) 二寸	(一・五厘) 四寸
本女 (七厘) 一寸九分	(八厘) 二寸一分	(五厘) 四寸
(六厘) 一寸六分	(七厘) 一寸九分	(三厘) 三寸五分
(五・五厘) 一寸四分	(六厘) 一寸六分	(一厘) 三寸
(五厘) 一寸三分	(五・五厘) 一寸四分	(二厘) 二寸五分

而して、背紋は背縫の縫代を取りますから仕上りは男物で三分、女物は五分下りが少なくなります。又抱紋は前巾の中心、袖の紋は袖巾の中央になります。

紋の合せ方

左右の身頃の紋の位置を定めて、右身頃の上に左身頃をのせて、紋を合はせて、待針を打つて裏に返へして、紋の所を一針ぬきに縫ひます。若し白い所の多いものは、白の羽二重糸か、絹糸か、で縫ひ、色の多いものは、其糸で縫ひます。そして紋の上下五厘位の所で小さく一針、二針

返へし針をします。

男女重ね下着の詰め方

袖丈	袖口	袖附	身丈	後身丈	前身丈	衿肩明	衿丈	肩巾	衿
男 (一厘) 二分五厘	(四厘) 一分	(四厘) 一分	(二厘) 一分 (人形一分詰める)	(四厘) 一分	(四厘) 一分	(八厘) 二分	同寸	左右二分五厘 (四厘) 一分増す	男物と同じ (四厘) 一分増す
女 (八厘) 二分	(四厘) 一分	(四厘) 一分	(二厘) 一分	(四厘) 一分	(四厘) 一分	(八厘) 二分	同寸	男物と同じ (四厘) 一分増す	男物と同じ (四厘) 一分増す

其他の寸法は、上着、下着共同寸法であります。そして三枚重ねる場合には、中着を普通寸法にして、上、下の着物は、其れ丈増減いたしません。

以上の詰め方は一般の方法でありますから、實際仕立ます場合には、其地質によつて詰め方を増減しなければなりません。例へば、上着縮緬、下着羽二重等の場合に、前のやうな詰め方をしたのでは、上着がだれて重なりませんから、上着の寸法を下着よりも、又袖の詰め方も袖丈の長い短いによつて斟酌しなければなりません。

第七回 配本

昭和三年六月二十七日印刷  
昭和三年六月三十日發行

非賣品

不許複製



『家庭科學大系』(22)  
和服裁縫

著者 大妻コタカ

發行兼印刷者 東京府大井町六二八七 福永重勝

發兌 東京府大井町 文化生括研究會

振替東京五一五五一 電話大森二九〇一番

部刷印會究研括生化文 所刷印

大妻



康銀・京東

會究研活生化文

3